主幹・麻生路郎

川柳雜誌

五月號

第八卷第五號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和六年五月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌 第八卷第五號目次

楊井二南(五四)
本社四月例會　福田山雨樓(四三)
續川柳家戸籍調　橋本綠雨(六三)
杭全町MEMO

六厘坊忌

▼日時　五月二日午後六時半(土)
▼場所　南區清水町電停西入北側端の坊
▼兼題　「誘惑」　三句
▼會費　二十錢

初心者の來會を大いに歡迎す

本社基金醵金者御芳名

醵金を拜受しました方々の御芳名を錄し御厚志の程を深謝致します。(受附順)

金五圓也　中見　光路殿
金參圓也　太田　隆彥殿
金貳拾圓也　出口　雨町殿
金壹圓也　木村　晃卓殿
金五圓也　大橋　素月殿　竹原　一久殿　廣瀨　無鬼殿
小計　參拾四圓也
累計　壹百〇五圓八拾錢也

文苑

不朽洞より　麻生路郎(一)
柳味を探る(二)　福田山雨樓(八)
新しき川柳の心臟　松盛琴人(二四)
川柳時評　松丘町二(二二)
柳の絮(二)　長野吉高(二八)
川柳鑑賞の立場　岩本素人(四五)
竹馬居雜筆　蛭子省二(三二)
麻生主幹の意氣と川柳の生命　三好革郎(三三)
川柳に對する疑惑　伊藤綠之助(一七)
松村敏郎君を悼む　伊藤神山人(四一)

創作

川柳塔……(二)
○
愚陀琴人　雅幽多聞
亂玩新水　柳路一徹
山雨樓町二　綠雨
◇
光路丹路　華水晃卓
觀月裸人　綠之助　艸樂
翠夢蒼太　夢裡　鶴峯
閑生明珠　登美坊　一流
計加豆秋　靈壺　春秋
双車二南
粒々集……(二七)
富士野鞍馬　前田五健　長崎柳秀

地下鐵

藥店ナンセンス　西田艸樂(二八)
藏じらみ(A)　尾崎澎洋人(三〇)
自然を詠はん　生田翠夢(三二)
不景氣風　荒井英賀夫(三三)
川柳のこと　山本巧笑(三四)
要領　藤田杜洋(三五)
朝鮮慶洲にて　正木柳健寺(三六)

創作奬勵懸賞川柳發表

……(三三)

一路集(募集句)

……(四二)
スポーツ　森東魚(四七)
塲末　松丘町二(四八)
船客　住田亂耽水(四九)
近作柳樽　麻生路郎選(二八)
同　安井ひろし選(二八)
光耀抄　麻生葭乃選(四〇)
各地柳壇……(四八)
表紙　田村孝之介

不朽洞より

▽私は何事に對しても常に熱と力をもつて、ひた押しにすゝむ。從つて私はよく病臥する。そして私の病臥の原因が肉體の酷使にあるといふことを痛感してゐるのであるが、病臥するところまで驀進しなければ些の休養をも思はない。

▽こゝに於て私の病氣は私の肉體を保持する安全辨だと思つてゐる。天が私に賦與する靜養だと思つてゐる。だから一旦病臥したとなると、今度は病魔追放のために全力をあげる。私の性格はそんなところへも極端である。常に病氣を忘れてゐる私は病臥して、はじめて病氣を發見するのである。

▽そして私は私の病氣に對して感謝する。私が病氣を發見して、私の熱と力を一時病氣追討に轉向することが出來ないとすれば、私は既に己に現世を離れてゐた筈である。この意味に於て私は私自身の病魔を祝福する。

▽しかしながら私の周圍に對しては、私の病氣は一つの罪惡であることを常に痛感させられてゐるものである。私の病臥は私の周圍に對して多くの支障を來たし、尠なからざる迷惑を及ぼしてゐることを思うと、病魔を呪咀することも又人一倍ならざるを得ない。かかる時、私は私の妻子の、私の知己の寛恕を乞はざるを得ない。(路)

川柳塔

○　伊藤愚陀

馬鹿馬鹿しくなつて自分の顔の皮つまむ
苦い愛情となつて風の夜を歩む
ビウテイスポットへ角度を保つ鼻がよる
体臭へ彼氏不覺によろめいて
空と地とつなぐ都會の輕氣球
こんばんはベットの上の人形よ
性愛技巧がネオンサインに霧散する

亂耽の結婚（三句）

結婚は結婚麻雀打ちに出る
顔二つ窓に並べて山霞む
二人に家が狹いでないのなり

○　松盛琴人

陽炎に隣の娘髪を結ひ
金がいふ苦情へなんの關せんや
女給よそう蠅のよにとりまくな
淋しいが三人醉うてしまひけり

病師へ

春寒し病院の床の白さなる

○　關本雅幽

ヒゞの手を見つめ洗濯春の水
ペンキ塗つて共同でやる店が出來
朝つぱら金借る保證人にされ
こぼけるな腰巾着が笑うてる
草の根を嚙む乙女子よ母が待ち
スカタンにならぬ不思議もあつて生き
ハンドルの艶に小さい自分を見
縫ひ賃へ少しねだつて春の帶
雜魚買ふも家の財布が一つなる

全快の路郎先生を句會に拜して

病魔なきを說く師の聲のやはらかし

○　竹内多聞

宮島と錦帶橋（九句）

嚴島鳥居ばかりが巾をとり

滿潮を鹿心得た脛を立て
水責めのやうにつかつた嚴島
大鳥居船でくゞるは懐手
人間と同じ歩調で鹿歩き
錦帶橋急いてる客にボヤかれる
殿樣の無駄に百姓困るなり
錦帶ばし身投を抱くに捗らず
岩國は橋を渡るに見へがくれ

○　住田亂耽

實踐もなくたてついたマルキスト
エレベータガールと二人きりだつた

雀人　米澤章と知る

卓を圍みて知るや廣大無邊觀
階級を昇る深夜の男かな

ある男

戀もないのか春の休暇を遊びに來

○　朝田新水

死顏の金に未練のあればとて
くぐかれたことをまぶしくネオン燈
カナリヤの雌雄は別な身づくろひ
遭難に戀といふ字は忘れてた

青年をあたら車掌に終りけり
流行を見極めて買ふ妻にして
ウエトレス夫ならざる子を宿し

○　岩崎柳路

支那街に又銀安の戸が締り
飼犬を撫て再婚日も近し
大望の又アリゾナの夢も見る
人質は拳銃の音遠く聞き
煙幕のごこからとなく機關銃

○　長谷川一徹

杖立てゝ占へば山雲深し
案内僧問へば地聲になりて云ふ
京言葉聞きたさに途西東
今日からの家主を問へば寶石屋
東山巡り終ふせて祇園の灯
問ひ行けば三條小鍛冶物販ぐ

○　福田山雨樓

感謝する氣持雜巾絞り上げ
甘たれた子の鼻聲に乘らじとす
玩具みな春の夕べの影を吸ひ
だんだらに禿げた生駒の花曇り

人前を女中だと云ふなりで連れ
親方の仕込みに堪えて聲替り
兒を負うた母へ市電は背が高し

○　松丘町　二

インキ壜にも大阪の煤澱む
鼻先に日を乘せてみてるて看守に對へず
ひとさまの不幸へ頭さげるのみ
自己を憎みつくして冷たき夜の指

義弟一女を擧ぐ（四月二日）

飲みあきて乳の雫が頰流る

○　橋本綠雨

ほゝゑみを四五人にさすよい女
白足袋を汚して今日はどこへ行た
膝二つ火鉢が中に一つあり
看護婦と音ばつかりの置時計
はかなさはベットの影がかさ低し

山中溫泉にて

三階の間に山頂が見えぬとこ

兼六公園

河北潟はつきり見えてよい日和

和倉溫泉にて（二句）

宿の灯がオールの波に搖れて居り
電話口藝妓を呼ぶに大きすぎ

かほる君の母堂を悼む

咳一つうしろ姿の母になり

◇　中見光路

父の死後金と名のづくものなく
娘になつた妻の報告
佛飯の湯氣ふか〳〵と彌陀如來
あさましの見つめた襖紙幣になり
面ないをされて人形賣られて來
斷りを言へば名刺は持つて去に
パセリーの積りにされて若旦那
ソースだぶ〳〵値下げの食事
不景氣をいふもうたてい春の雨
繫がれた菜箸に似し夫婦とも
手を拍てば女呼ばれてゐるとする

◇　山本丹路

友情にあまへて酒にありつきぬ
四九日父の羽織を着せられる
嘘の愛でけつこう僕は泣きますよ

◇　中澤濁水

銀髯を颯爽として網をうち

自殺でもしかねまじくに句を作り
不足税また幸ちやんと娘が拂ひ
水引をかけて亭主へ突きつける
エプロンに紺の蛇の目も春の色
午前二時着るに間もない服を脱ぎ
撒水車を洒だつたらと洒落て行く

◇　日野華水

待つてゐる間の長い櫻茶屋
古本屋梯子で木をはろて見せ
所書き知つてる方へ向きを變へ
番小屋は池を見下すとこに建て

◇　木村晃卓

流水に聲あり思ひ直せと云ふ
裏返しボタンの跡が目立つ春
春の氣にならうとつとめ外へ出し
母の手を引いて引かれし日を想ひ

朝陽氏と語る（二句）

初對面此處は入口だと氣付き
貧しさにせめて一夜をとめ兼ねし

◇　川村觀月

經驗の話にくまれぐちとなり
お守を拾つて石の上に置き
花咲けど烏さへづれぐほうかむり
摘み草に姙婦も集ふ春なれや
猿之助世間の味がわかるかい
無雜作に米を洗ふも斷髪よ

◇　中野裸人

雨の窓へ浮氣女がもたれてゐ
店の方へ金庫をさげて行く眞晝
子のいらぬ話に二人共ねむり
洗濯物を澤山ためて醫者へ行き
現金を見せて女にいやがられ
交叉點の春のなまめく裾模樣
自轉車の上から顔を見て通り
たんと金ためてる事を聞いて來る

◇　伊藤綠之助

美保關の遊び（二句）

燈臺できけば神話が面白し
燈臺の此處にも春の葱坊主

路郎師の病床へ

春はテロだ〳〵櫻の下のテロ

姪見習奉行に出る

女十八如何なる春が待ちゐるか

◇　西田　艸樂

白粉臭う園子を喰べて下向する
角帽が香具師と知れても少し聞き

船客

家のこと心配すなとテープが伸る

◇　生田　翠夢

死に程に惚れてゐたとは知らざりき
女からもうねだられる年となり
唇の赤さよ處女を誇つてゐる
洋酒の瓶にうつる春の灯
そこはかとなく死んでゆく麗人よ

◇　平井　蒼太

火葬場の煙りが風に散つてゆく
帽子かむれば齡丈けに見え

◇　村松　夢裡

疎とい事あれでも困る十八九
欠勤に判つたうそをついてやり
思ひ遣り過ぎて迷惑がられてる
形式はなんでもよいと金を借り
水洟をたらしてそばの出前持ち

◇　福田　鶴峰

不平云ふ氣で就職したのかい
戀人に會へず淋しき日記かな

緑雨氏二十年勤續を祝す（二句）

約束に雨も嵐もあらばこそ
趣味でなら酒も異性も近づけむ

◇　阿部　閑生

背の子の眼脂も拭かで醫者通ひ
春愁の妻ふけて見え若く見え
咲いた話散つた話に風呂ぬるく
ねえさんと呼んで貰うておつかさん
病妻のそばへ冷く寢床敷き
臍天を向くを歡ぶ好々爺

◇　西村　明珠

寢る爲めの二階へ來れば淋し過ぎ
明日死ぬか十年先きに死ぬのなり
表札屋筆をねぶつて念を入れ
看護婦は治つた話ばかりする
叱られる事かと見れば金をくれ
打ち解けて催促事をいひ洩らし
子供等は君だ僕だと仲がよし

◇　立井登美坊

食ふ爲の力を田舍者にされ
妻君の積りで帽子持つて居る
消印は春天苦勞したらしい
腰紐を借る繩飛びの野邊に出て

靴下の穴妻君がありはあり

◇　碌　一　流

花咲けば春の終りを思はされ
あゝ十七才なり見習看護婦
心地よき限り陶器の割れる音
活花を習ひ御飯は炊けませぬ
をかしやな脊廣姿で手を合はし

◇　三　好　計　加

ハーモニカ仲々歌になりにくい
煙突の煙りこちらへ許り來て
山描けばお日様つけるこゝにして
肱つけば小さい方も肱をつき
骨を拾ひいに行くに春風暖かく
菱餅を鼠大勢引く繪本
もうあの子大きからふゝ話に出

◇　須　崎　豆　秋

夢にまで胸を押へに來るお金

◇　片　桐　靈　壺

物色してたこれが花嫁
御覽遊ばせ金魚死んでよ

追憶斷片（三句）

石積みて積みて別れを惜みける
足なげて渚の雨に濡れてゐし

繼すればオリオン星座なご覺え

◇　喜　多　春　秋

タイピストちよつゝ〳〵肩をよせ
腕力を見せやうゝする話ぶり
懷古談彈丸は當らぬものである
御下問へ今日の社長の脊が低し
萬歳の兩手肩からぶら下り

◇　河　野　双　車

もう嘘も言へて女給の面白し
乳をやる姿ほんゝの女にて
劍戟をする場に困る街の子等
起重機の默々動き日本晴

◇　楊　井　二　南

ビルディング女をかばふ影を持ち
春日和大八車子を乘せて
しるこ屋の女ショールに包まれて
口入屋女は晴れた顔でなし
だだつ廣い家に新妻養はれ
メダルの數へ婚期が迫り
松葉杖醫があつて惜まれる
姉の手で育つ子供の湯が長く
プチブルの惱みを知らぬ鑿穿機

柳味を探る（二）

福田山雨樓

思想背景の匂がわれ等の創作陣に顯著な足跡を殘したことに就ては前稿に摘記したのであるが、何故に思想と云ふやうな理智層が川柳と云ふいとも端的な暗示的な表現形式を選ぶのか、又それが如何なる川柳味を發散するのであるかを考へて見たいと思ふ。

尤も川柳に時代思潮の反映を見たのは今に初まつたことではなく、その昔江戸期の現實詩に於ても既に之が片鱗を啓示して居り、川柳が所謂『輕快な機智の閃きと、奇警な觀察の鋭さとを以て、すべての人間の弱點社會の缺點を剔抉し、人情の機微に入り世態の核心に突込んだ』と稱せらるゝ若干の實證を齎してゐるのである。確かに古川柳が先鞭を付けてゐる。だが、古川柳を通じて語られた江戸庶民の鬱憤は、思想的反抗は今にして思へば極めて淺薄であり皮相であり微温的であつた。これは當時の武斷壓制下に於ては誠に已むを得ぬ弱者の忍從だと云へると共に、虛無的、遊惰的そして廢頽的な生活還境にあつた江戸ッ兒が、時代に反逆すべく去勢された無氣力なあきらめの奴隷滿足の一面を物語るものでもある。古川柳に盛られた思想色はしかし何がなし階級への不滿、弱者の悲哀、强者への反抗餘憤であつて、それが偶々江戸ッ兒が持つ洒落な皮肉なそして客觀批評的な氣風と廢頽し切つた世相背景とが相反應して、斯の萬句合暦摺の内容的一色彩を現出せしめたに過ぎないのであるそれは江戸ッ兒と云ふ未だ啓蒙せられざる庶民に依つてかつがれておつた類型觀の一端を僅かに吐露されたものであつて、云はゞ是非好惡の幼稚なる尺度から幾何程も頭を出してゐない。

それから時代は幾變遷して我が國に於ける西洋文明の模倣期たる明治末葉に至り、狂句から漸く脱した新川柳の樹立を見、時事川柳が勃興するに及んでいくらか時代との交渉を深め川柳の社會化も稍紅潮を呈したけれども未だ特筆する程の收獲を擧ぐるに至らなかつた。漸く大正後半期に至り所謂革新川柳の出現に依つて初めて思想詩らしい川柳の擡頭を見たのである。爾

來思想問題が益々重要性を加へ社會經濟の異常なる不安に直面し來つゝある近時に於て、思索川柳乃至思想川柳が柳壇の一方に一大勢力を以て蟠踞するに至つた。加ふるに先年來プロレタリヤ文學の目覺しい活躍と相俟つてプロ川柳が花々しく出陣奮起して來た。殊に柳壇の元老、劍花坊氏が新興川柳の行くべき道を指示する自信を以て書いたと自負せらるゝ『川柳王道論』は新味に乏しい議論ながら無産派川柳の爲めに大いに氣を吐いてゐる。

斯くの如く思想背景をもつプロ川柳の擡頭したことは、階級意識に目覺めてゐる現代人の寧ろ當然なる動向ではある。何故なればわれ等近代人の生活は今や思想問題と最も密接な關係の上におかれており、われ等の文學に於けるイデオロギーの問題はわれ等の直接的な關心事だからである。而して川柳といふ簡潔緊密な表現形式がもつ藝術的迫力乃至批判的尖鋭性は叙上の階級意識に目覺めた近代人の思想なり理念なりを盛るに、蓋し適切なる藝術樣式であることは想像に難くない。即ち川柳がもつ最も尖鋭な、彈力的な、奔放な、焦點的な魅力は、川柳家の思想的に、理論的に、批判的に培はれた或る特種な機質性をすら顯つて以て詩的表現の完成に迄行進せしめるのである。それは恰度、繪畫に於ける眞紅の色、音樂に於ける最高の調律に似た階級性を物語るものであつて、長時間視靈し聞き靈すことの堪えられない程機能的決定性を持ち、効果的な一面を收めてゐる。それだけ創作するもの詩を生むものにとつて近距離な誘引をそゝるわけである。手頃なハンマー、鋭利な鋸の役目を果すことになるのである。このことは熟した思想、熱した意識がより効果的に表現され易いからその方法と形式を選ぶのだと云ふことのみを説明したやうであるが、これは恐らく相關性のものであつて、名刀はよく切れるから大切にし大切にするからよく切れると云つたやうなものであらう。

けれども川柳と云ふ詩を通じて表現せらるべき思想的背景は何處迄も句主の審美感の濾過に依つて藝術化されたものであることを條件として要求したい、少くとも僕の信ずるところでは……從つてプロ川柳が階級闘爭への武裝藝術として、文學的戰術としての目的意識の上に進むものであるとするならば、それは最早われ等の信ずる藝術創作の範圍ではない事を主張したい川柳詩人の本質として、時代思想を吸集し、咀嚼し、消化し且つ階級意識の上に立つて居り乍ら、しかもそれ等の思索活動を感情の具體化に迄内應せしめるだけの詩的教養を忘つてはならぬと思ふけれども、川柳の中に一つの思想體系を組み立てることや、川柳を闘爭理論の方便視することは深く自ら戒めなければならぬと思ふ。川柳家は思想の所有者であつても思想の體系制作者であつてはならぬことを牢記したい。だが常に熱球を投出してゐるプロレタリヤ文學理論の矢面に立つ—これに充分反駁するだけのあたまを持たぬ自分としては、信じて是なりとする先人の言葉を借りてその所信を裏書しておきたいと思ふ。

『藝術はまた、その本質上商品たるべきでないと共に、他の

何等かの運動の從屬的役目を果す性質をもてるものでもない。それは生活と密接に關聯して居たのは事實である。けれど、それは決して生活への從屬ですらもない。それは生活そのものゝ一つの要素である。卽ちそれは、人間の表現的一形式である。人間が斯くしないでは居られなかつた一つの活動樣式である。藝術をもつて政治運動の手段方法と考ふるが如きは藝術の本質を解せざるも甚しき議論と云はねばならぬ』

『文壇は今やプロレタリヤ藝術運動に再燃しつゝある。詩壇には相變らず、民衆派やプロレタリヤ詩派等の論爭が絕えない短歌壇にも社會意識から出發する生活派の熾烈な主張があり、今や○○氏が、現柳壇の社會思想的先驅者たらんとしてゐる。それ等の人達が、虐げられた民衆を代言して無產者の解放と人類的平等愛の前に飽くまで社會的な障壁を打ち碎こうとする××的精神は尊いものであると思ふ。然し、それは飽くまで、そうした階級に生きてゐる人達の必然的な叫びであり、苦惱であり、自覺であり、情熱であり、自律的な藝術家であるのが尊敬に價するのであつて、そうした人達の持つ思想的な背景から、直ちに社會主義的な藝術觀を以て、あらゆる藝術活動を一色化し去らうとする運動には、その理論的根據に於て、多くの矛盾があると同時に、そうした藝術觀が、あらゆる個性藝術を否定し去るべく、藝術の本質はもつと高い意味の個性的精神活動である事を明確に主張して置きたいのである。』

○

次に思想的背景の句の川柳味に付ては例句によつて鑑賞して見たいと思ふ。

會社この折合つかず家鴨なく　亂耽

（この句は昨年確か川柳三味誌上で近藤飴ン坊氏が、好きな句、推賞すべき叙法の句として例擧してゐられたやうに記憶する）

資本主義制度の傀儡である會社を拉し來り更に解雇に當面した事象を捉えてゐるからこの句に近代味があり、思想背景がありと云ふのでは勿論ない。こうした社會的事實の前に純なるべき青年が懊惱を重ねてゐる弱々しい苦悶の姿を通じて或る太い思想の直線が貫いてゐるのである。苦悶をあつさりかなぐり捨てるべく偶々郊外の野趣に觸れやうと足を向ければ、うよ〳〵こした家鴨が一齊に嘲笑を送つてくるではないか、彼女等の歩きつ振りかして人を馬鹿にしてゐるやあがる、こん畜生！こでも云ひたいやうな氣分情調が皮肉こも冷罵こも付かぬ微苦笑こなつて、われ〳〵の憂鬱をかき亂してくれる。しかも何がなしにわれ〳〵を考へさしてくれる近代色が滲んでゐるこころにこの句の新鮮な川柳味が躍つてゐるのである。面白おかしく笑

へと云ふのでなく、考へて見てもくれと訴へてくるものがある恐らく客觀の主觀化に徹した作品であらう。

同志の顔へ月がよろめく　路郎

（新進氣鋭な二南、華水の一行がかほる居で路郎師の顔を見るなりこの句の話を持ち出したとて師はその晩の句會で非常に喜んでゐられた。若い人の川柳に對する情熱と、元氣を）

同志と云へば無產鬼闘士の一味を指すやうにも取れるが必ずしもさうでなくてもいゝ、われ〳〵志向を同じうする川柳使徒の姿と見てもいゝ、社會鍋に聲を嗄す救世軍の士官達を想像するも差支ない。それ等の二人或は三人が疲れ果てて歸路を急ぐ姿、蒼白な顔、冷きつた手足、夜露を撫でゝ來る風、風、風、野道の兩側はまるで死んだものゝやうに田圃も草も熟睡してゐる雲は怪しくちぎれてゐる。おゝ冲天の月！　月の影は動いてゐるしかも蹣跚として彼等の行く手に白い光を浴びせてゐる。全くまんさんとしてゐた……それは錯覺でも亂視でもない、正しく同志の眞劍な眼に映じた眞實であるのだ。今日のお互ひの涙ぐましい奮闘の足跡を振り返つて見ると血の出るやうな思ひで胸が一ぱいである。しかし流石に月も無情なときばかりはない。われ等のこの眞劍な努力に同情の道連れをしてくれるのだわれ等は今後益々堅く手を握り合つてその目的の爲めに力を盡さなければならぬ。と奮起の勇猛心をそゝつてくれるこの十四字音の力にこそ鋭い川柳味を認識すべきであらう。この句を單なる特異な感覺のひらめきとのみ取るが如きは極めて狹量な認識と云はねばならぬ。文化の戰線に馳せ參ずる闘士の血みどろな奮闘は川柳の持つ鋭い利劍を通じて鞭撻され、指導され、皷舞されるのである。思想と意志とが情熱のるつぼの中で巧に具象化されてゐる。大きな主觀の客觀化。

頬骨が高く求職斷られ　杏三

これは又極めて常軌的な川柳素材をもつて來てゐる。一讀淋しくほゝ笑ませる。一見平凡でしかないやうであるが、それでゐて巧な叙法と、素材が齎す眞劍な喜劇とがわれの〳〵もつ思想網と涙線へ同時に引つかゝつて、笑つてばかり濟まされない動搖感を覺える。アイロニカルな情緒を涙で拭ふ氣持がする。迷ひ兒の手を引いてやるやうな昏迷を誘はれる。まぎれもなく近代思想線上を彷徨する白い淡い川柳味の呈示である。この川柳味は事件とか人物とか云ふものを偏重視することなしに、その背後に横はつてゐる思想神經に觸れることによつてより高く鑑賞せらるべきであらう。新聞紙の三面に表れた歪んだ社會の顔の反面に、こうした人生苦惱の姿を凝視することの出來る川柳の存在を更に進展せしめねばならぬ。（續く）

竹馬居雜筆

蛭子省二

(16) にんじん雜話

一 岐阜から出てゐた『よのころ』誌が、川傍柳評釋を使命とし、多くの頁を捧げた貢献は、今日でも燦然として新川柳史に傳へらるゝもの、只終を完ふせず休刊したのは惜しき極みである。二月中旬第三編丈けを纏め冊子としたものを、嘗て私も參加し卑見を寄せた緣故を思はれて御高情に因り一本を惠まれた事を感謝して居る。一圓二十錢の價が附してある。柳雨翁からの最終のお手紙中に、

「よのころ誌の川傍柳評解は單行本として出版の事、博文館に話して見た處引受くる旨回答に接し申候に付只今三面子氏意見書込中に候、併し是はまだ二三ヶ月の猶豫可有之候」

とあつたので、いづれは全冊が手頃な便利な本となつて、私の机上に備えらるゝ事の心樂しみがある。實は『よのころ』社發刊の初篇單行本を持合せぬので、兼ねて完本が欲しい。

○人參の鉛たか後家（川傍柳初ヘン）

＝柳樽二七篇に「地人のまづさ人蔘の鉛なり」＝

▼鉛の字不明、人蔘の錠の誤りとすれば亭主の呑殘りかとも思はれるれど。

の『人蔘の鉛に』就て

▼原本アマリとあるを筆耕がナマリと誤か、かかる例ままあり。

▼原版本には明かに鉛とあり、鉛は俗にまんばちものをナマリと云ふ語の當字即ち人蔘のなまりとは、にせ人蔘のことそれを後家が澤山に持つてゐると云ふ句意である。

とあるのを讀むだ。人蔘といへば朝鮮である此地に住みつつ、プロレタリア丈けに二三本呑むでみた以外、全く智識もなく注意も怠つて居るが、二編朱樂菅江の序文中に、『言葉はなまるかしらねど、人の心を御種人蔘ちつとも鉛はござらぬ』とあるのは、ナマリと讀むでよくはないかと察する。南嶺子に、或醫者が藥籠

のクスリに、小言をならべつつ、ころ〳〵と眠りけるに、夢に色々の藥の神が現はれ議論をする、その内の人參を記す

思ひもよらぬ方より朝鮮冠を被り、五葉の紋付たる官人すすみ來り、我は人蔘の精なるが、本草にも卷頭にのせられ、もとより重く用ひられしとはいへ共、各一所に藥籠の小袋に納て、益氣湯を合すとて、醫者より人蔘を入るとの、ことはりにもおよばざりし物なりしが、世に用ひらるるに隨て、價貴くなり、醫者もわれらを三分入て、五分藥七分藥に禮を受けてはたまらぬ故、此藥に人蔘何分いれられよとの指圖、そのかみ醫者より入たる時は、病家に其論なかりしが、今は病家より入るるによりて、五分は多し、三分はすくなからんとの相談、醫者の工夫をはづれて、增減するゆへ我功能もうすく人蔘かへつて人を害するの説にあひ、われもとより直根とて、直ぐなる生たちなるを、すみ〳〵まで堀かへされ、糸にてまかれ、目を重くせんとて、頭上より鉛を鑄こまれ、日本までうりわたされ、外の藥は煎じくるしめらるるも、一度なるに、煎餘までを二三度くるしめ、最功を見せて、死命を蘇するの勳勞を見する事度々なれども、中分より下の人は、人蔘の功にてたすかりたれ共、人蔘ゆへに身上をほたせしなど惡口にあふ、無念さましく一命をたすけし大恩をわすれし人、非人と思へ共、のまれて廻仕ふたる跡は是非なし、さだめて貴殿にも、大功を見せたる病家より、謝禮おもひの外わづかにして、是はと思はるる事あるべけれ共れだりにもやられぬは、我等を賴て本復し、われらをうらむるやからと同じ云々

此一節中に句釋の參考となるものがある樣な氣がする。

キキョウの根も藥にはなるが、東京でそを朝鮮人蔘なりと稱して鮮人が賣り歩いたといふ新聞記事をみた。『日本勢人蔘倉でつかみやひ』で、戰爭といへば伽羅や沈香から馬蹄銀まで、持ち歸へるとのお定まりは、人蔘も御多分には漏れないが、內地に於ける栽培は三代將軍の享保四年、對洲侯が朝鮮人蔘六株を献上し日光に試植されたるに始まるといひ、お種人蔘と名づく。（五月雨草紙參照）

朝鮮のお種藥種屋とりにがしは關聯させてある句であらう。本草綱目にも、年深くして長成なるものは、根人形の如し、故にこれを人薑と謂ふ。人身とも書くのは、人間の形をなすを上品とし、一大得意先たる支那では、形狀を主として取引し、其の希望に好適のものは開城附近產に限り他ではうまくゆかぬ。出雲產は紅蔘模倣品として、輸出はされるが形が好みに合はぬため、振はない近況である。アメリカ產は色も形も惡いので、イミテーションとして資格が乏しい

わが長野縣產は開城品に劣らぬものを採取し農家のうるほひとなる。田中香涯氏の『間違だらけの治療』に、

友人菅竹浦氏の説に依れば、何首烏の形はいかにも男子の所有するキン玉に酷似して居る……未開時代の支那に於て、何首烏が用るられたのも、或は此の如き形態から附會して、迷信の對象となつたのではあるまいかと、此考へは蓋し中らずと雖も遠からずであらう

彼の人蔘が人間の形に類似する處から種々の神秘的傳説を生じ、萬病に靈効を奏する神藥のやうに信ぜられたの

と、同じやうに。

こ記して居らるゝから、深い御研究の結果であらう故、專門家に任ずとして、今日でも形と質とが一致するものとして標準となつて居る。

【附記】前に出雲產に一言したが、大正十四年八月の大朝紙に、松江の舊藩主が寶曆十年八月高麗から種子を取寄せて作らせたのが最初であるといふ、出雲產のものは品質よく、起死回生の驚くべき靈驗があるといふので、人蔘作りは日を逐ふて盛大となり文化三年よりは國用のあまりを輸出し、十三年には大阪に人蔘賣支配人を置き、年產額二萬斤に達したそうであるから、現在の產額一萬五千斤內外よりは遙に多かつたわけで、ここにも亡びゆく產業の哀れが止められてゐる

海游錄＝ダボラをふいた旅行見聞記ではある＝に、

倭人又問ふ、貴國（朝鮮）の人蔘性味は、天生か或は人力あつて造成するか否、余曰く、美性は天禀を以て貴となす、毒あるものあれば炮製して之を用ゆる、或は傷損あらんを恐れるからである。況んやこの靈蔘をや、勿論人力を容れぬと、倭言ふ、日本にも亦艸莖葉と根と一に人蔘の如きものはあるが、貴國のものの如き味はない、或は造成の方あるを疑つた、而かも今公の言を聞けば、日本の產する所は似て非なるものであらう。

なぞ記してある。今の住む地から少し離れた同福が、朝鮮人蔘の興りだとも傳へられる、文獻備考に、國中處々人蔘を產す二種あり、一を山蔘と謂ひ山精の自生するもの、一を山養と謂ふ、山上に種へ歲久しうして後採取するもの也。而して二者皆得易からず、全羅道同福縣の女子山中に蔘を得て、之を畑に種えしが、崔と云ふ者傳へて之を播殖す、是れ家蔘の始め也。朝鮮蔘は天下の貴ぶ所なるを以て、崔は潛にもたらして、之を淸人に賣る、淸人の阿片に病む者人蔘を用ゐて藥と爲す、故に我が朝鮮人蔘を得て甚だ之を珍とし、然れども之を服して亦往々毒に遇ふ、崔其故を知り、後には蒸して之を賣り、大に其利を獲て富一道に冠たり、是れ紅蔘の始なりと、尙は聞く所に依れば是より先、高麗か元帝の勅を奉じて、人蔘を貢獻せし事史に見えたれば當時既に朝鮮人蔘の支那に著名なりしを知るべし、然れ共人參栽培の起源は其年代を詳にせず、紅參を製造して支那に賣りしは、今より約二百年以前に始まりしが如く、爾後每年受曆官及冬至使の燕京に使いする時、携へて之を淸廷に獻し、使者別に若干を齎して、私に之を市に賣るを例とし、遂に高麗參の名支那人に嗜炙せらるるに至りし也。

支那では回春顯著な萬病の靈藥として朝廷の大官が病革まれば、人蔘を賜ふた又父母の死に頻するや藥舖に走り、賃假し枕頭に供へ、最後の孝養を盡す表示ともなした。

○生きて娘のかはる人參
○あきらめてゐる口へ人參

で『孝行な娘わが身を煎じさせ』と大病人に呑ませた事は、奧州安達原、大久保武藏鎧、矢代家騷動、根南志貝佐等いくらも記され、『昔は大身はいふに不及、伽羅たかぬ人なし、人蔘買人稀なり、近

年は伽羅たく人まれにて、人蔘は下々まで買なり』（八十翁昔話）となつた

近代世事談には、『人蔘の功は古より、普く世に知るゝ雖も、寛文延寶の頃數原通玄といふ良醫、朝鮮人蔘の功能を考覺、大病の治がたきを救ひ、衆人の命を助くる事限りしられず、其妙術世に鳴而後典藥頭に至、是より大功ある事を彌知る』とある。が『神農及諸醫、人蔘毒あることを知らず、扁鵲ひとり毒あるを知る、まことに古今の名醫と云ふべし』で、人蔘に毒あるは昆陽漫錄其他にも載つて居る。

和漢三才圖會の著者は醫者であるから虛實を詳にせず、やたらに人參を盛る者を、人參醫師と笑つて居る。してみると

○人參をおつかなそうに藪醫もりの方が、ある意味での國手かもしれぬ。許六の風俗文選にも、『彼人蔘醫者を察し見るに、理窟人の利錢する心になぞらへ、又は低人の價高直物にめでて、ひたすらたふとまるると見えたり、人參の力にて、あまねく人の命をたすかるならば邊塞醫療なき地は、人種は盡べし。たとへ死ぬるにもせよ、人參に殺さるゝ者なし、人參ある國は、人參にて人を助け、又人參にて人を殺す、生死の算用は持にして置くべし』と。

○妾をねめ〳〵人じんを干す

○妾の親の見飽く人じん

○出家の恥の人じんをのむ

ある坊さんがチウインガムのように人參をかむでるるので尋ねると、お經が長くひッぱり得るからだそうだ。エロ趣味の人參雜話は稿を別にしよう。

○丸山はひげ人じんを花に出し

『朝鮮人參之種にて作立碎、大人參、髭人蔘、本石町二丁目岡肥後並大傳馬町藥種屋共之方にて、商賣致候間望之者は右之者共方にて相調可申候』（享保三年十一月二日）なごあり、

上人參　半兩目ニ付　代金　一兩
並人參　同　同　二分
肉打人參　同　代錢　一貫文
細髭人參　同　同　六百文
但並肉打細髭は小半兩包五ヶ包共相渡

とか、天明七年後小民に買得させんとして

上人參　銀七匁五分
刻人參　銀四匁
並人參　銀五匁
細髭人參　銀二匁

とみえて居る。某書に毛生藥として『朝鮮の髭人參を煎じ洗ふ』とある。小兒必用養育草卷三には、急驚風癒て後、調理には六君子湯、人參、白朮、白茯苓、陳皮、半夏、甘草これを六君子湯といふ也

此人參には朝鮮人參ならば、三厘加ふべし、朝鮮鬚人參ならば、五厘ほど加ふべし云々、以て人參とヒゲとの質もわかる

最近の相場は

朝鮮人じん　一八、〇〇
髭人じん　七、二〇

御所櫻堀川夜討に、『一人の親が大煩ひ今をも知らぬ危い命、せめて髭人蔘でも進ぜられ取止める事も有らうこ……ムウ何ぢや親の大病、人じんが呑ませたさに妹が給分借つたのか……孝行は同じ事コリヤ銀戻す、大切な場に成つて、髭位では、屆くまい、大人蔘で養生せい、ト板銀一丁投出せば……追剝樣に銀貰ふは命冥加な親父樣、人蔘が切れたらば、又剝れに參りましよト、銀戴いて歸りけり。』ヒゲをお茶代り出す家もある。

○角力取ヒゲ人じんに助けられ長談義になつたから筆を改める事にしよう。産地開城は高麗の都であるから、高麗人蔘の名稱の起りし所以で、現住者も人蔘富豪であり、商賣には一種の氣概をもつて居る、三浦陽士の『國史の研究』に

私は昨年高麗の舊都、朝鮮人蔘の特産地として、有名な朝鮮の開城に參つた彼地の商人は一體に朝鮮人には珍らしい商才があつて、富豪も多く團結も固い、豪商の子でも一度は必ず、他へ丁稚奉公をさせる習慣がある、市中を歩いてみても、何んとなく緊張してゐる

を忌むで使はなかつた處から、旁仕官の望みを斷つて、由來一つの港灣があるではなく、交通の不便な地方に住むだ彼等も非常な努力を以つて、商業の新天地の開拓にこり掛り、到る處に經濟版圖を征服して、開城商人の通つた後は草も生えぬ位であるこ言はれた、

案内の人は商店に坐つてゐる丁稚小僧を指して、彼等も金持ちの小供であるこ教へて呉れた、然るに開城人は高麗の遺臣こして、これを滅した朝鮮の李氏に仕える事を好まず、李氏も亦これ

こ、實際街なごも整然こして、建物も亦奥床しい、古より今に到る迄人じんの聲價を墜さぬのも、彼等の奮闘に與る大なるものがある。

（雛の節句の夜稿）

川柳に對する疑惑

伊藤、緑之助

川柳が矢張り古い殻から抜け切らない眞に新しい時代の川柳を見せてくれる分野が到つて小さい。時々川柳を抛て了はうかと思はされる。川柳といふ文字の上からの輕視と、川柳といふ古い概念に捉はれてゐる觀念、こんなものがこんがらがつて、川柳から脱出したくなる。何故川柳を守り抜かねばならぬのか。眞實大衆の詩だとしても、何故如上の嫌な世界から苦闘を續けねばならぬのか。

且てたまむし（昭和四年頃）で烏山一庭氏が時代の川柳を主唱して、新興川柳とか、立詩川柳とか、生句とかの名稱を以て獨立してもいゝといふ意味の事を論ぜられてゐたやうに記憶してゐる。（或は違ふかも知れぬが、確にそうであらうと思ふ）これらも同じ氣持から出發してゐたではなからうかと思ふ。川柳が少くとも我々の主張する川柳が、眞に民衆の詩として相まみえるならば、たとへその名稱が變つたつていゝ筈だ。そして新しい立場から、大衆詩を確立するならば、川柳として闘ひ抜くより、迅速であり、又、係累を絶つ上に於て確實であらう。

山陰の詩人、谷尾壽彦氏は山陰日々新聞に於て『生活行進句』を創始し近來投句が多くなつて來、その質に於ても漸次向上の途に見てゐるが、これらも俳句から脱れ出た試みである。で壽彦氏は言ふ『短歌も、俳句も、川柳もみな惱み抜いた揚句は殆んど同じい短詩線に顔々合はせたではないか。その一致點こそ尊いのだ生活行進句が卽ちそれだ』

一庭氏といひ、壽彦氏といひ、その形より、その詩を見詰めてゐるのだ。

私は時々この短詩を考へてゐる。果してこの人々の主張を鵜呑みに賛成しやうと思はない。そこに私の惱みがあるわけだ。

本格川柳を口にして遊戯三昧に耽けり乃至は新興川柳を掲げて尖端意識を喜ぶ共に私を川柳から追ひ出さんとする厄介ものだ。

然りとはいへど、やはり川柳からさらばが告げられぬとは、何が私をそうさせるのか。

その詩の發表に於いて、川柳といふ形に何ら不足がないといふのか。

若し私が俳句をやつてゐたら、今頃川柳に苦しむと同じ惱みに捉はれてゐるに違ひない。

だとすれば、一體川柳を捨てられぬ原因は何處にあるだろうか。

『川柳に對する疑惑　何んだかわかつたやうで要領を得ない。恰度里見岸雄氏の『國體に對する疑惑』のやうに。

光耀抄

大阪　房子

講習のクリーニングに日をつぶし
蕎麥の花母は淋しく脊戸に待ち
チャルメラに亦たも添乳を惶される
盲目に何の初日ぞ手を拍たき
文化村も良いが海抜千五百
かつちりと肥へて居ますと兒の自慢
美しい貌で鰯の値切り樣

螢ヶ池　あざみ

目さむれば母も溜息ついてゐる
せつかくの樂しい春を床につき
高熱に氷がとけて朝になり
淋しさは母の寢顔のほゝが落ち
病床へ朝蜘蛛の來てよろこばれ
高熱がつゞき二度目の遺書を書き

神戸　茂もよ

病床吟

新聞紙今日のかひなに重た過ぎ
寫眞帳見れば達者な時もあり

葭乃選

髪結うて見たいと思ふ日もありき
往診のベルにごきんと胸をさせ

螢ヶ池　かつ美

妹の愛の手紙に涙する
眠られぬ夜は母の事兄の事
十八になつても人形いぢつてゐ
鶯の聲ねながらにきいてゐる

大阪　千里

御見立ての上手却つて邪魔になる
笛がなる〳〵舞臺活氣づき
娘を連れる手前もあれば薄化粧
値切り役最後の幕に打つて出る

螢ヶ池　かず子

家の世計に死んでくれとは母もいはれず
死ぬなごと云うても見たがこわくなり
顔色がたまによければ熱のため

深日村　ナヲミ

ごみ箱で捨てられた花咲いてゐる
いつそもう白痴であつて欲しいなり
スピードの電車へ蹴の手をやすみ

大阪　靜香

勿体なや亡祖父の事を思へば

大阪　不路子

高髷の重みに處女の日は暮れる

岐阜　誼女

燃え切れぬ何かを抱きて對坐する
い〻加減我を折つてはとす〻められ
病み疲れ看護疲れに灯のあはさ

螢ヶ池　浪路

病んでから母の貯金がへつて行き
人形に晴着を着せて病んで居る
ラヂオきく事も大儀な此の頃よ

大阪　壽枝女

葱坊主ほんぼこぼんの莖にたけ
二三日病めば淋しい花瓶にて
立つ度に扱いた指差見えぬなり
孕み雀餌のある方へおりて來る

螢ヶ池　伊勢子

ラヂオ聞く耳へ涙のつたつてる
高島田もう二三日と云つた顔
公休に近く小僧の良く動き
淋しさをまぎらすためか唄つて見

螢ヶ池　紅蔦

世を捨て〻養生のみをせよと母
退院の友も涙で歸り行き
女位と云はれて女强くゐる
心配の眼にキューピーの腹立たし
ベットから花見も出來て施療院

螢ヶ池　可都惠

女鯛程肥えて寫つてゐる寫眞
食堂へ行くも嬉しい日が續き
空想を畫きベットの上に居り
出鱈目を云つて無沙汰のわびをする
自信ない此の病体をもてあまし
姿見へオ、我顏の痩せしこと

大阪　日出子

寄宿舍へ行李の方がさきに着き
童心にかへる由なき草笛や
まださきで買へると土產買ひそびれ
不斷着のまゝで氣やすう逢うてくれ
上女中下女中のと大地主

兄弟けんか

とも角も年上の子を叱つとき
髮梳いて重荷が一つおりたやう
彼の人の言ふことならと疑はず

川柳時評

松丘町二

拍子木二月號に岡崎城雨郎氏は「川柳イデオロギーの脱線」なる文章で私が書いた桑原京郎論を、論難してゐられる。私にも氏の云はうとする意味は解るので一應素直に受取らうが最後に「かゝる謬見を發表せられては川柳誌に新作落語を載せる事以上に川柳を冒瀆するもの」などゝ氏一流の物差を振廻してゐるので、少し許り返事を試みることにした。

ある作家の作品を通じてその作家を論ずる時、小説や戯曲や長篇詩は知らず川柳の如き短詩に於てはその全作品に目を通すことの必要は云ふまでもない。若しその中から拙い句のみを拾ひ出さうとすれば、如何なる大作家の作品に於ても容易であらう。かゝる時作家自身さへ抹殺したく思ふやうな句を寄せ集めて論難することは、作家評としても作品評としても決して美事な態度だとは私は思はない。あらゆる批評の前提として自己批評がある、とは私も亦批評の唯一の基準として守つてゐる。そして一人の作家を眺める時、自己批評の正當な素材となつてくれる作品のみを集めて、私は私の批判の筆を進める。常に私の自己批評の正當な素材となる句を、私を私の最も信頼する『川柳雜誌』の創作欄に求めて一向事缺かぬ。この意味に於て私はあなたのいふ仲間褒めを確信を以て今後も續けるであらう。

さてあなたはいふ。『理智があらゆる幻を蹂躙しやうとする、と君の云ふのは籠城する君自身の狭い理智の驚きではあらうが』云云。一體この世に幻を蹂躙しやうとせぬ理智なんてものがあるのか。詩人の理智も常人の理智も、理智はその宿命に從つてあらゆる幻を蹂躙しやうとする。當り前のことだ。只理智がたとへばそのあらゆる幻を否定しつゝ精密な理論の糸を辿る時、對象の數々の解析の末は遂に理智はその性能の精粗に應じて理智相當の究極に達する。同時にその解析の糸も切れねばならぬ。かゝる時理智は何を始めるか。常人の理智は徒らに足踏するか、或は廻れ右をするか、何れにせよ蒼然として佇むだらう。同じく様に蒼然として佇む詩人の理智は、その辿りつ

くされた理論にこの時一種の眩暈を感ずるのだ。こゝに理智の歌は始まる。最初あらゆる幻を蹂躙しつゝ進んだ理智が、この時初めて己れの幻を織り初めるのだ。理智が一つの情熱となつて形を化し色を作り、その歌を歌ひ始めるのはこの時だ。理智派詩人の正當な起點かこゝにある。私はあの一文に於て徒らに理智は詩に非ずとして斥けた人々の誤れる一事情に注意したまでだ。それにしても京郎君を正當な理智派のスタートに立つ作家として、その將來に誠實な期待をかけたのに何の障りがある。

お丶寒月これこそプロの姿なり
取り入れのうまさが鼻について來た
しみたれな男に柳ちりかゝり
生眞面目なのもうるさがられる

「唯それだけではないか」「川柳として詩として何があるのか」「何といふ蕪雜な物の見方であることよだ」「コンモンヒューマニテーの押賣だ」等々。一体こんな調子であしらつて行けば、大抵の作品は鼻であしらへるといふ點で、あなたの文章は見事な見本だが、元來鼻であしらふといふことはこの世で一番やさしい。まあ嘘の次位にやさしい。そんなやさしいことをむきになつてやるがものはなさゝうだ。と云つて城雨郎氏は他人を鼻であしらはれば調子の出ない批評家だなどゝ穿つわけでは毛頭ない。

以上の句の表現が生であることは私も認める。だが傳統俳句の糟糠を嘗めて、さゝやかな美を歌ひ吐息を歌ふ底の川柳なぞより、京郎君の作品が我々の少くとも私の胸をうつといふ事實を如何ともしがたいのだ。『しみたれな男に柳ちりかゝり』に於て若し『櫻ちりかゝり』とでもあれば月並なのだ。

花嫁となつてほんとに泣きにきた
雪よ降れ〳〵逢へた今夜だ

形式が内容を決定するといふ理論を認める私には、この句の表現技巧亜にリズムが鑑賞者に反映する内容として、安つぽい感傷とみへるか、理智の歌ふ一つの情熱と映ずるか、といふ問題の解決は、あなたから否定された京郎君が、若し川柳作家としての自分の眼の能力の鋭敏は、たとへば城雨郎氏の眼の能力に比べたら凡そ神秘的だと高言したとしても、今のところ吾々は鑑賞者の立場にあつて同君の高慢を正當に輕蔑する如何なる言葉をも持ち合し得ない、といふ事情に比べたら遙かに容易な自明の問題に屬する。

×

前號雨町君の「ある角度から見た作家亂耽」論の餘論に於ける形式主義へ對する疑問符は鋭い。

拂はぬときめたぞ家主やつてこい　ひろし
寢るだけに家一軒はもたいない　同
ことり〳〵と屍が引かれゆく　愚寵
生きてるることが氣兼になつて來た　湖舟
ごうせもう二月は二十八日よ　雅幽

これらの句をフオルマリズムは如何に取扱うか。もし佳句として認めたとすればこれをどう説明するか。と雨町君はいふ。フオルマリズムからみてこれらの句は佳句と思はない。と云つて仕舞へば卑怯でも問題は片付くが、私もまたこれらの句の大部分は佳き句と認めるので、雨町君の文章の終つた所から始めて、少々喋つて見度い

と思ふ。そして恐らくは後戻りする。

作家がその腦中に如何なるイデオロギーを抱かうとも、その精神が言葉に捕へられて、言葉に捕へられることによつてのみ明るみへ出る光榮を有するといふ事實は如何ともしがたい。同時にその言葉を正當に理解する他の人間があるといふことが、作品の評價の上に絶對に必要となる。

寢るだけに家一軒はもたいない　ひろし
ことり〳〵と屍が引かれゆく　愚寵
生きてゐることが氣兼になつて來た　湖舟

これらの句が多かれ少かれ我々を動かす所以は、作者の精神が言葉に捉へられて、川柳としての表現に最も適切なる一つの形式を與へられた結果に他ならぬと信ずる。無技巧の技巧とは如何にも屈伸自在な言葉ではあるが、又形式主義の一つの現れに他ならぬ。

音樂家は素材として音といふ言語を持ち、畫家は素材として色といふ言語を持ち、文藝家は素材として言葉といふ言語を持つ。川柳家の素材も亦言葉に他ならぬ。川柳制作とは言葉といふ素材を十七音字に抽出して、詩的リズムを持たせることに他ならぬ。言葉が詩的リズムを持つことは、言葉が言葉の表現し得る最高の技術を示すことに他ならぬ。卽ち言葉が特殊な形式を持つとき、初めて川柳と呼ばれるのだ。形式以前に川柳の內容なんてありやうがない。素材とは川柳にとつても俳句にとつても小說戲曲にとつても、等しく人間の歌ふ言葉といふ物質以外のものを指さぬ。かゝる時川柳家の撰擇すべき素材とは何か川柳家が自然界を眺めやうと、プルジョア生活を覗かうと、プロレタリアイデオロギーを叫ばうと、乃至は智識階級の智識が演ずる悲劇を歌はうと、勝手である。要は如何に現實を把握するかにある。如何なる形式を與へるかにある。（現實とは作家にとつては言葉の素材である）表現技巧が百パーセントの練達さであれば、その句の形式が決定する（固定ではない）內容も亦百パーセントであるのだ。卽ちその句はその句に關する限り完全な句であるのだ。川柳の叫き短詩に於て、形式が反映する內容とは、そのリズムが齎す直感的情緒と、その表現が齎す說明的連想に他ならぬ。形式が百パーセントの練達で、その內容がゼロなんて句はありやうがない。若しあればそれは形式が百パーセントのお粗末さを意味する。

『川柳人』は現實主義を奉ずると云はれる。あらゆる文學の中で最も少く言葉を用ゐる川柳は、他の如何なる文學よりも現實的に現れる外はない、といふ點でこの主義は間違つてゐない同時に眞の藝術家の實踐の前提は現實主義である他はない、といふ意味に於て誠に美事である。正に傳家の寶刀である。作家にとつてはこの寶刀を磨くといふこと以外に道はなく、批評家にとつてはこの寶刀を翳して人を切る以外に何の興味があらう

（二二頁へ續く）

麻生主幹の意氣と

川柳の生命

三好革郎

麻生主幹が全快してくれた、その顔を見て何とも言へぬ喜びを感じる。病氣だと聞く度にヒヤッとする。昔の事を思ひ出すからだ、大學病院に入院された時のことを思ふからだ、あの時にも、俺は死なぬといつて死神を振り切つて生きられた、今度もあの通りだらうと思つて居たら、矢張りさうだつた。

醫者が退院させないといふのを無理に自動車で歸つたら快くなつたといふ御話である、麻生主幹に此の意氣がある間は麻生主幹は死なない、川柳は生きる。

麻生主幹の生命はこの頑張りにある。何糞にある。川柳雜誌が今日あるのは、麻生主幹の何糞ッの頑張りと、橋本綠雨君の粘り强さ、それと同人諸君の熱心さにあると思ふ。これだ、これが詩であり、川柳だ、それ以外にも川柳もあり、詩もあるだらうが、本當のものはそこから生れると思ふ。

本當の事を言へば、人にうまれる。異端者扱ひにされる。世の中が狂つてゐるんだから仕方がない、人間が猿の世界に入つたやうなものである。

猿の川柳を作る人は多い、これを眞似川柳、エセ川柳、一名エテコー川柳といふ、そんなものが流行する、安物が流行する時代とはいへ情ない、眞の川柳を一句でもよいから試さうと努力してゐる麻生主幹亜に川柳雜誌同人諸君の態度には頭が下がる

久し振で句會に出て見ると、出席者の顔觸れがすつかり違つてゐる。然しその句には昔とは違つたものもあれば、舊態依然たるものもある。誰の句がどうといふことは言はない、僕は言ふ資格もない、然しながら、元氣だけは句に出てゐる、不景氣な世の中で、元氣なのは川柳家だけである。紡績家と巡査を除いては……。

これは麻生主幹の精神が、皆んなの精神の中に流れてゐるからだと思ふ、何糞ッの元氣がこういふ雰圍氣を作つたものと思ふ、何でもいゝ元氣にやることに依つて世界は拓ける、川柳の世界には不景氣かない、あれば行詰つた連中が泣言を列べてゐ

るときである。

麻生主幹が、死線を突破した意氣が川柳雜誌の傳統的精神となつてゐる間は、川柳雜誌は永久に生きる、人間一人の力は弱い然し人間の力は強い、清元や、長唄は何も摑むところのない唄聲が空に消へるが、それが傳へ傳へられて行くところに人間の精神力の強さ、眞の藝術の偉大さを敎へられる。川柳は文學の藝術である。毎月幾百千と發表される川柳の精神が、うたかたの如くに消へて殘らないのは、根本的に作者の意氣が弱いからだと思ふ。

麻生主幹の樣な、死んでも死なないといふ意氣で句を作る人があつてこそ、始めて、句に久遠の生命がある。この意氣た、これだ。これが今日分つた、それだけでも句會に列した喜びを感じる。結局人間だ、人間を作れ、句を作る前に人間を作れ凡てそれからだ……。（四月二一日端の坊に於て）

新らしき川柳の心臓

松盛琴人

川柳に一の定義をつくるなれば、詩の定義と同じく＝川柳詩は作家其人の趣味感情性格を語るもので、詮じつめると自己人格の表現であり、自家創造の藝術である＝と言はれる事を信じる、由來川柳人の觀察力は非常に鋭いと云はれてゐる、それだけに又社會風潮の尖端を行く事もあり、時に思想の先驅者ともなるが、併しながら作家の趣味感情性格等々は、川柳人自らが社會人であるが爲めに、其創作は自己人格表現とは言ふものの、全く社會と沒交渉なものではない。之を簡單にいふなら、『洗練された個性により詩化された川柳は、綜合的に社會と密接な關係にあるもの＝と言はれる、されば川柳詩は社會の反映であり、時代思想の歸趣を示ずものであるとも云ひ得る點が、常識的に川柳は社會詩ともいふ所以である。

其如く、川柳は社會と密接の關係にあるものなれば、其時代々々の色彩と特異性を持つて生れる、今之を解剖的に述べれば『川柳は其時代々々の社會風潮が、人間の純心へ反映して、個性の淨化は、靈的精神の發動となり、感激の高潮を誘ひ、川柳といふ一形式に乘托して、詩念を發表したもの＝故に川柳詩は、一人格化せる藝術品である。尙一歩突込んで內容を探るならば『川柳は詩的な個性が根底をなすものゆえ、純個性的なものであると』考へ得る。

假りに茲に川柳の天才家が在るとする、其天才は斷然時代を超越して頭角を現はす、そして飛て次に來る新川柳時代をも構成すべく、時勢に一大原動力を與へ、而已ならず其時代に率先して新時代の精神を發揚する、さればこて此天才家が全く時代の風潮に脊を向け、或は時代に離れて生存するものではなく、彼れの創造は其卓越せる明察力を以て、時代を批判し反省して

の上に、迸り出づる鋭敏なる頭脳の閃きであるから、これも其主動的なるものは、純化された彼れの個性の力だと、いふ事が出來るのである、從つてこの天才は、當然時代に遲れてゐる川柳は、川柳進化發展の上には餘り用をなさぬものだと知るがゆへに、之を捨てゝ更に潑溂たる新川柳を高唱し、古きものを清算せんとする運動を起す、そは卓絶せる頭脳の所有者であるが爲めで、斯る天才家を時代の革命兒といふのである、之が川柳上に於ける眞僞の判定は、眞の實力家であるか否かに依つて決定される問題であるが、何時の時代にも、川柳を向上進化せしめんとする爲めには、眞實さうした力強い川柳家の出現を望んでゐる。

併し其如き天才に非ざる者或は凡人が自覺も修養も積まず、徒らに血氣にまかせて、淺薄なる獨斷を以て時代の寵兒たらんと企つるならば、そは正しく川柳を毒するもので、彼の傳統川柳家等が時代錯誤の川柳を唱道し、無自覺に陳腐なる舊思想を振り舞はして新川柳の發展に禍ひしつゝあるに等しく、共に有害無益である。

今茲にさうした新舊川柳の利害に言及しつゝ所信を述べて行く。凡そ川柳の進化を各時代に徵して之を檢討する時は、判然と其色彩と特異性は分明する、それは國の文明を知るに歴史を離れて窺ふ事が出來ぬ如く、時代を離れて其時代の川柳詩の特色は見分けられぬ其如く時代思潮の檢討はやがて川柳詩の批判に缺く事の出來ぬ要素で然も各時代による特異性は川柳詩はもとより、あらゆる詩と名付くべきものには附隨する事を知る、故に若し川柳を創作せんとなればそれ等の總ての研究を果した上で（事實は不可能に近からんが）現代は現代の文明度に於ての社會進化の反映を持つ川柳詩を創造するなれば最も完全なるものと云ひ得べく、併しながらさうでなく共、現代は現代の社會進化の反映を持つだけの川柳詩であつても立派に現代の新川柳詩としての價値は有するのである、其意味に於ては、最早江戸時代の川柳の特異性や古川柳の特色は、昭和川柳詩の質とは自づと別であるといふ事が判然とする。

然るに若し此新時代の社會へ既往の川柳を押進めんと試むるなれば其行爲は無智なのである、何故となれば社會風潮の進化程度は最早往時の如き狀態ではない、故にさうしたものは單なる骨董品としての價値しか認められない。（少くも川柳の何ものであるかを知る識者間或は眞實なる川柳作家間には）骨董品は有閑者流の娯樂か趣味的遊戯の範圍に於てのみ珍重されるであらうが、決して今日の川柳詩として、はた、文學として、新進社會の生活を反映する詩としては吸收されないのである、然るものを彼等傳統川柳家は此時代に目醒めず、飽くまで自家存在の爲め既に生命なき過去の川柳を奉じて之を大衆へ押賣りせ

んとするさうした非行は（川柳を知文學的價値の上層へ引上ぐる爲めに）少しの効果もなく、反つて川柳を毒し進化向上を妨げるだけの役割を勤めるだけだと考へる、左れば既成川柳や時代遲れの川柳は如何に過去に於て流行したからとて現代詩的價値なきものと捨て去らるゝが當然であらう、併し吾人は過去の川柳を十把一束的に非難するものではない、少くも古川柳既成川柳の内にも非常に優れた名句は藝術的なものが含まれてゐるから今人と雖も之を認める事に吝でない。

以上を直裁にいふなら、江戸時代の思潮背景を盛つた川柳が如何に其時代に流行し賞美されてゐたとしても、それは江戸時代に於てのみ價値が認められるのであるから、其價値的生命は其時代に限られたものであるといふので、然して其價値は、其時代の社會を反映してゐる點に依存する。

然るに其樣な古い川柳の特異性と色彩を固執して、現代に當て篏めんとする川柳家が存在するは何故かと考へるに、それ等は皆此見易き道理に盲目なるのと、江戸時代の川柳の特異性へ幻惑してゐる爲めだと言へる、然も彼等は名句のみが持つ藝術が時代を超越するといふ眞相を古い認識で誤つてゐる事と、川柳は江戸に生れたといふ誇りと、江戸趣味（それは鄕土的狹い見解）若しくはそれ等の榮譽？の解消せられる事を憂ひこの固執心より、過去の殘骸に醜くも嚙りついてゐるに過ぎない、從つて彼等は其自我を主張し一貫せんとすれば自然現代社會の進化せる風潮へ相反馳する事になる、事實彼等は文明の惠みに浴しながら常に現代の進化せる風潮を白眼視し無批判に之を嫌惡排擊しつゝあるの醜體を以ても知るべきである。

吾人は言ふ、川柳が時代の社會風潮を反映しての藝術である以上現實の社會風潮の反映を無視せんとする輩は川柳の藝術化へ對して其進化を阻止せんとする『ならず者』と同一であると烙印を押すものである。

古川柳は川柳を研究する上に參考資料として等閑にすべきでなく且時代背景を知るに必要であるが、決して其まゝが昭和時代の新川柳ではない、故に現代は古川柳であつても、既成川柳であつてもならないのである。

尙又社交藝術なぞ云々して藝術を手帳に用ひやうとするが如きは、川柳を明治初期のものに引戻す而已に役立つだけであると、然も川柳が藝術なれば之を手帳藝術とする事は川柳詩を冒瀆するものであると指摘する事が出來る。

結末を急ぐ、新しき川柳は新しき社會の見地に立つて、新しき藝術として成育させねばならないと、新川柳の心臟は鼓動してゐる。

（一九三一、三　二〇）

難解史句の中

東魚生

19、鎗持勘助については、卯木氏の川柳江戸砂子（下巻）に左の如くある。

——松平越後守の槍が勝れて長く、常に槍持を苦しめたので勘助は後の奴の難儀を慮つて、槍の柄三尺ばかり切り縮め己れも割腹して相果てた。（中略）元祿十五年石に彫んで寺内（青松寺、あたこの南）に建て奴地藏と稱し云々

例句として、三面子翁の擧げられた『治世の功名槍の柄を』の句の外、

槍の柄を切つて奴は石になり
柄と腹を切つて末世に殘す槍

と云ふ二句が擧げてある。故人の爲と御參考までにお知らせする（川柳江戸砂子下巻は近日出版になる筈である）

粒々集

東京　富士野鞍馬

昔居た女給が客になつて來る
エヤガール無事で清水へ着けり
子供から阪妻はもう忘れられ
今度來た女給がエロを流行せる
春の宵時計の鳴るも眠い樣
警察へもらひに來たも叱られる
若い警部にきまりのわるいモール
見物の三日目高架線に馴れ
初物へ又姑の皮肉が出
古本屋這入つて見ても讀み續け
工事場へ白足袋マントひるがへし

松山　前田五健

あの頃は若かつたさと燗が出來
春らしく赤鉛筆の轉ろがりぬ
採用の通知社名を書き習ひ
素踊は無遠慮の口喜ばれ

御影　長崎柳秀

サービスがなんだとチップ出しをしみ
世話甲斐があつて嬉しい夜學生
江戸つこは何んでも訊けば答えさう
もの云へばおのぼりさんにして仕舞ひ
調なわぬうちにも樂し新世帶
寢たのやら寢さゝれたのか午前二時
死ぬまでの戀をば親もうかつなり

近作抄録

路郎選

檢事ちこ手ごたゑのある奴こ知り　廣島　露斗
働いた稼いだ　ほねがほきりなる　同　同
のぞくまいショーウインドの春の柄　同　同
あさつての方へ思ひの向く日かな　同　同
長々こ書けば書かれるうそのふみ　同　同
北風もものかは乳房ふくませる　大阪　壽仙

亡　妻

お伊勢詣りもせずにみまかる　同　同

二女に袂る

オヂいちやんこはつきり呼ばれ胸疼く　同　同

再　婚

その船の荷を減すごこか石を積み　同　同
一寸した怪我病院でごまかされ　大阪　進一郎

地下鐵

藥店ナンセンス

西田　艸樂

當事者には何の氣もつかずやつてゐる事が、他人から見ると職業毎に、いろ〳〵と滑稽味がする。「職業を通じて川柳を作れ」と誰やらの御議論だつたが、却つて局外者から自分の職業をうまく詠み當てられて始めて日常の職業的意識を醒まされる事もある。三月號の課題「藥湯」などは、自分の職業に近い題だけに、これぞと思つて力作したのが全くゼロだつた、後で考へて見ると、あまりに專門的、學術的理論的に走つて、自分では興味を以てゐる事柄が、他人樣では却つて職掌柄平凡としてゐる事に、興味を以つて居られる樣に思はれる。

大衆的であつて深いもの、そこが六ヶ敷い。

うその様に怪我人一人消えちまひ　同　同
うけこりの仕事だみんな退いて呉れ　同　同
鶴嘴よ説くあれよ雲雀鳴く　同　日日城
火事騒ぎ心配はない風呂へ行く　同　同
ぬかるみは湯屋ののれんを出た所　同　同
坊ちやんをきけば刀を挿して出た　同　同
醫者かへてみなさいなごこ案じさせ　同　同
俺れの眼に映るな春の夫婦連れ　呉　光哉
逆境の中にも主義こ自尊心　同　同
合槌を打てば講談めいて來る　同　同
エロなごこ云ふまい借金してゐます　松本民郎

嫁ぐ前　二句

はかなさをあの娘に寄せていゝものか　同　同
氣まぐれに同棲もしてウエトレス　同　同
今の身は百圓札をおがむだろ　姫島方民
膳の上榮養不良もむりはなし　同　同
おそろしき豫感白粉のびやらず　同　同

冷笑君結婚す

あの岸を目あてに夫婦手をつなぎ　同　同
はいはいこ叱られて居る面白さ　服部利生
上役よ何も云はずに委しこけ　同　同
親鸞の心にそはず御同行　同　同

薬局の主人公として、店頭に出て髭でも剃つてゐると、いろんなナンセンスに遭遇する。これも自分では當然の事にしてゐるが、他人樣なら、餘程奇異に感ぜられるであらう。

月經帶を恥しう買つて行く娘。他人の事にしてハート美人を買ふ中老人、治淋劑を友人から(?)ことづかる青年、甚だしいのになると快味感覺の頑いのを訴へて來るマダム。三ヶ月のメンスに惱みを打ち明ける處女(?)など。

今日も今日とて

「煙草のニコチンを落す藥がありまんか」

と這入て出たのが、某商業學校四年級の生徒。

「何に附着してゐるんです」

「指です」

「單なるニコチンなら溶解藥ゝ持つ行けば溶けるが、長い間煙草で爛べたのは一刻には取れ悪いれ」

「僕、今日身体檢査ですれん」

「叱られるか」

わざとらしく聞いて見るのも面白い。

「繃帶しといたろか」

「繃帶を解かれたらどうする」

仲人の返事一家を春にする　大阪　菊路
貯へが出來て世間が怖くなり　同　同
眼鏡など掛けて妹こましやくれ　同　同
風船屋人出の春の店を出し　金澤　今雨
社と家と機嫌が逢ふ父の顔　同　同
藥屋根のあれが生れた家ならん　龍田　翠峯
この上は口を減らして働く氣　同　同
卷煙草一緒に捨てゝ歩き出し　犬山　練屋丁
横着が言へて看護婦喜こばせ　同　同
嫁ぐ娘の手なみを見せた床の梅　松山　秋無草
閑そうな音で本家も店をしめ　同　同
かたわれにシグナル赤い灯をそゝぎ　大阪　敏坊
インテリに十日戎はさげすまれ　同　同
近道をして木蓮の香を慕ひ　金澤　白雨
濕めつてる燐寸のような戀だつた　同　同
春の日を勝つてはならぬ碁の相手　鳴野　豆佛
燒芋屋たゞで遣りたい兒をながめ　同　同
其の嘘を無智な女の嬉しがり　大阪　公二
我が背に指さす人と思はざりしが　同　同
湯氣一つづゝコーヒーが配られる　同　白柳子
エキストラ社長の顔は知らず居る　同　同

「せやなア」
「ほんまに何ぞ藥おまへんか」
「悪い事だが今日一偏だけ同情してあげる」
「おゝきに、どうしまんれん」
「親指と人さし指とへ、これを塗つて繃帶しとき給へ」
「スルフォイヒチォール酸、アムモニウムこれなんだんれ」
「それでよい。校醫が繃帶を解いたら、ボール投げで突指をしましたと、そう言ふんだ」
「眞つ黒けやな、これなら胡覺化せるやろ」
「それからもう一つ、悪い事を教えるが、どうしても止められぬ煙草なら、指サツクを嵌める事だれ、それでも歯が承知しないだらう。歯はスモカで磨くとしても、息が臭い。まア今の中に禁煙するより完全に方法はない」
胡覺化し料十七錢を拂つて、安心して學校へ急いだ生徒もあつた。

藪じらみ（A）

尾崎海洋人

女は「クックククク」と云つて笑つた。
「川柳なんてお止しなさい、眞實に貴君は

連れ出せば別な女給へ奢らされ　大阪　みつる
淋しさに心中の記事目にとまり　同　同
抱いて寢る孫の温みをうれしがり　鳥取　耕民
無事丈けの便りに留守居たよりなし　同　同
知れる日もあらうと山の中で死ぬ　明石　啞聲
働けば腹の減るのも面白し　同　同
慰める氣かハーモニカ吹いて呉れ　螢ヶ池　石松子

病院生活

惚れてゐる噂病室賑やはせ　同　同
色氣付かぬうちに師匠は仕込むなり　同　美玉
高島田娘肩から風邪を引き　同　同
飛行機へ日光浴の立ち上り　螢ヶ池　奈緒美
看護婦の青春寫眞なごうつし　同　同
兄弟で俺だけ親の顔知らず　同　梨風
山程の罪があるのに金ですみ　同　同
風呂敗の數限りなきお方哉　尼崎　義郎
食へぬとて神なご祀る柄でなし　同　同
丼を食ふにも百貨店へ行き　大阪　無鬼
鞍とれば馬の脊中の禿てゐる　同　同
一人去り二人去り正義は悲し　同　魚郎
使はれる身は半賃に乘りなれて　同　同

お馬鹿サンれ」

鼻筋の通つた、目のパッチリした、小さな顔が、目の前でくづれた。

「眞實に貴君はお馬鹿サンよ」獨言を云つてツト立つた。

女は、其日の夜行で新潟へ旅立つてしまつた。

自然を詠はん

生田翠夢

三月の中項の或日私は久し振りで汽車に乘つて西の方へ向つた、窓外に展開する播州平野一帶の麥田は若々と生の希望に輝いて健康な呼吸を大空に向つて伸々としてゐた。

田畝に働く農村の人達を眺めたとき、今更ながら都會とは全然別な感銘を得たのだつた。

私は考へた、いや考へさせられたのだ。

川柳が個人の生活であり詩であり且亦世相の記錄であるのに何故農村に於ける田園川柳の少ないかを、何故今迄見受ける大多數の川柳が餘りに都會的神經衰弱に犯されすぎてゐるかを。

社會相は都會と云はず農村と云はず現代

茶よ花ゞ習ふ身でなく女事務　大聖寺　醉羊
流れゆく人形手もない足もない　同　同
借家ではあるが今年も無事に暮れ　鳥取　青水
過去は過去時世だ頭下げて置こ　同　同
座敷中かき餅にして故郷の春　明石　了念
藍の香も嬉しう故郷の蒲團に寢　同　同
死に方にまで華やかさ求めてる　愛知　花太夫
戀の暇にはマルクスは俺のもの　同　同
おむつの風も春めくものか　東京　摩耶火
不機嫌さ炭をおこすにかゝつて居　同　同
いゝ女ごつかに際をちらつかせ　京都　水馬
豆炭の臭ひ氣になる母の咳　同　同
廢兵の生きる姿に仰々し　松山　青帆
チップなぞ思ひもよらぬ客ばかり　同　同
落第へ母は苦しい肩を持ち　大阪　桂枝
着せてやりや脇から出てる子供の手　同　同
髪結ふてやりおはじきをする　豊中　有三
不甲斐ない兒ですよ坊主にでもします　同　同
フト池に小石投げ込み國を去る　大阪　海洋人
寢返へりを打てばふるさゞ湯の匂ひ　同　同
境遇の話ごつちも國訛り　長崎　柳兒

では可成り突つめた處に行つてゐる筈だ、然しながら、農村に於ては、都會程刺戟がないかも知れないが、線の弱い細い都會生活の一斷片の未だ其幾分の、幾十分の一斷片のみに捕へられすぎては、現代川柳の大部分がゐまいか それは餘りにも病的であり、疲勞的であり、且亦頽廢的ではなからうか。

もつと朗な川柳が慾しいものだ。

川柳イデオロギーから見れば、邪道であり異端者であるかも知れないが、今少し線の太い朗かな且つ健康な田園川柳の振興を計らなければならないものと信ずる。

一束梢神經の微細な感覺のみに捕らへられて何の大成の結果を見んやである。現代都會世相の如く餘りに變態的ではなからうか。

川柳は人事俗風を詠ふだけと古川柳家の眞似事を止めて、現代川柳の標語とする處の生活であり詩であり且記錄であるからにはもつと〳〵田園に出進して、田園に我等の同志を得る事だ、作家を養成する事だ。

そこに健康な現代川柳の發達と、强味を有し且萬代不易な川柳の振興を得るものではなかろうか。

川柳發達の俳句、短歌に比して微々たる

叱られた話しがはづむ謝恩會　同
醉ふほどに別れともないこの話　大阪　革郎
子供貰ふに近所とやかく　同　柳甫
不仕合せ子がばら〳〵に引取られ　同　同
頬張つてゐる猿の顔笑はれず　同　同
手内職春をうらまずによく動け　螢ヶ池　龜坊
スポーツの娘に母の氣がつかれ　同　同

病床吟（二句）

二ン月も今日ぎり重湯たゞ白し　大阪　苦美
死なれては困る女房の看護振り　同　同
質草に俺を取つてはくれまいか　東京　ひさし
盆栽に似た生活は今日も亦　大阪　周波
幸福も何處かに落ちてるかも知れず　螢ヶ池　鬼子
喀血が止れば急に淋しくて　同　六華
親一人子一人父と酒を呑み　同　吳柳
雪の野に動くは電車ばかりにて　同　禮二
搾取なぞ忘れ組長代理する　三重　澤里
猥談へお隣りさんも笑ひに來　大阪　洋々
苦勞人意味は忘れた樣に生き　同　忠彌
空想が大きい丈けの若さなり　愛知　木仙
ベルで呼ばれて上衣着て行く　大阪　大夢子

は斯くの如き點から發したるのではなかろうか。

病的闇い川柳は止めたいものだ。

都會の川柳家よ、田園の川柳家よ。

六・三・二〇

不景氣風

荒井英賀夫

世の中が緊縮又は産業合理化などと言つて失業者が日日に增して不景氣〳〵と不景氣風が毎日〳〵猛烈に吹いて居る。

A不景氣風〳〵と言ふが一体此の不景氣風は何メートルの早さで吹いてまんのやろ

Bあんた未だ知りなはれへんのかいな此頃の新聞の三面の記事見なはれ

昨日は河で一命取られた（一メートル）今日は汽車で一命取られた（一メートル）明日は電車で明後日は猫入らずでと言ふぐはいで不景氣風が大阪否日本全國では日々何人何十人と尊い人の一命を取るそやさかい不景氣風の早さは一メートル（一命取る）だんがな。

Aなるほどそれもそうやな。

退院のこれから厚司に身をつゝみ　同　清信
くちびるもうしろ姿も俺のもの　同　山茶花
失業の父とみくじを引いて去に　神戸　一鴉
男親子守をするに同じ藝　大阪　凉哉
今日も亦通天閣を見るばかり　同　柳影
一丁目違つて火事の見舞受け　同　いわを
來年はたゞ食ふだけで生きてやろ　螢ヶ池　實德
サボる氣の朝へ女房癇高し　同　沙門
安らかに棺に納まる夜を思ひ　大阪　四五磨
掛けられた日めくりはまだ紀元節　伊丹　松好齋
食堂は不平の聲の捨てごころ　大阪　吐句坊
兄弟の目がかち合つた菓子皿よ　長野　有爲郎
看護婦の二年目少し塗つてゐる　螢ヶ池　長二郎
花曇り壽しを卷くのを知らぬやう　同　紫浪
罰あたりと云ひつゝ母は嬉しそう　同　好郎
知れきつた筈の微熱にさへ怯へ　同　可章
霜置ける春一番の水を汲み　同　播州
淋しくてがたつく椅子に落ちつけず　大阪　木公
淋しさに燐寸三本すつて見た　同　千草
畢竟は金にせうとの硬論よ　大阪　鯉友
不身持ば父はあまいにしてしまひ　鳥取　暢山

川柳のこと

山本巧笑

「川柳とは何ぞやですつて、まあそんなむつかしい言葉なんぞかまはれませんよ。現在の僕は一句でも多く眞劍に作ることなんです、まあ貴方も一句詠んで御覽なさい。川柳が持つよさ、有難さも自然に分りますから」

から答へてくれる川柳家があるとしたら僕の川柳に生きる心はどんなに喜ぶことだらう。

人間なんてくだらないもんですね。まあ考へて御覽なさい。一例を申し上げますが山を寫生するでせう。すると其の山の形、色彩等色々苦心し乍ら畫くんですが、其の山の向ふ側のことなんか、少しだつて考へなんかしないですよ。こんな事を言ふ者の方が或ひは笑はれるかも知れませんが、人間の生きてゆく道にいくらでもあるんですからくだらないにも程があります」

同意を求められた僕は面喰つてしまつた。とつさの場合致し方なく。

「まつたくそうです。貴方の言ふ通り人間の頭程くだらないものはありません。

失職の淋さ砂も手から落ち　大阪　南陽
獨居の寢間からバットの煙ながれ　東京　救命
大雪へ喰はねばならぬ朝を出る　大阪　夕鐘
逢ふ來て頁の足らぬ日記帳　同　志洋
親子して金を返すにかかつて居　愛知　巧笑
頭から買はぬと決めた支那呉服　大阪　哲郎
自働車の輪に副ふ埃御所の春　京都　九二夫
氣の知れぬ子を送り出して老夫婦　石川　しをし
金もなく死にたくもなく病みほうけ　蟹ヶ池　句郎
一生を金に積つて見たりする　鳥取　湖山
講演の通り貯金の利は殖へず　尼崎　虚白
大吉の御籤で一寸氣をなほし　大阪　憲坊
失業はせぬが女房も子も弱く　同　没食子
アマチユア寫した鶴の首がほけ　宮津　水郎
日の永い國から持つて出た行李　大和　勝二
山一つ越せば慈愛の母が待ち　大阪　八歩
表彰の子ばすり切れた草履なり　同　泉流
泣いてゐる子をとりまいた女の子　神戸　富士雄
あの綺羅が穢いものと思はれず　大阪　明晴

彼氏は此の答で滿足したらしく。

「貴方を川柳家と聞いてお話し致したんですが、私の考へと川柳家の考へと一致してゐることを嬉しく思ひます」

こんなお世辭をつけ足した。

要領

藤田杜洋

學校といふ處では毎學期試驗をやつて、その點數の多少で及第とか、落第とかを規めてしまふから試驗のある一と月程前になると、そろ〳〵勉强をしてゆく。之が所謂試驗勉强と云ふものである、こうした試驗勉强では要領のいゝ奴になると、人の能力の半分足らずで、いゝ成績を取つてゐるから、誰もがその要領を考へるのは當然で、我も我もと、なるべく勉强をする時間を少なくし(つまり遊ぶ時間を長くする樣に)いゝ點を取らうとするので結局學校としては要領よく世を渡る事を、教へてゐるのではなからうか。

そしてその要領をうまくつかんだものが何々校と云ふ肩書のある紙片をもらつて、世に出るんだから、世の中は考へものだ。

兎角要領とはいやな言葉ですね。

うまくゝと子にだまされて笑ふのみ　愛媛　英賀夫

開運のお札に蠅の元氣よし　大阪　天絲

髭たてゝ見せる重みもあるのなり　朝鮮　如空

運命や如何に時計の進むこと　石川　溪鶯

失望の窓にカナリヤさからはず　神戸　碎月

好感を持たそうとしてエゴイスト　京都　扇調子

バナナ燒階級戰のこゝも聞き　大阪　千雨

又雨だ自分で蒲團のべてゐる　兵庫　雨壁樓

金が有る爲に目的果されず　大阪　清光

ドアー開ける瞋恚へ冷たい粉の雪　大阪　繁坊

病床より

窓の外に飛ぶ鳶さへもうらやまし　螢ヶ池　九品

繪看板同じ所を二度通り　神戸　繁堂

母病むの電報にて

身を堅めする迄母よ生きてくれ　大阪　三碧

彼の無邪氣さで戀人を待ち　螢ヶ池　白雲堂

辻野つと云ふ半疊へ斬られてる　大阪　吼城

喜んで帽子も投げるフアンとなり　新潟　鳥八

水車小屋いいあんばいに雨が降り　大阪　白扇

及ばざる空の高さよ奴だこ　同　東川

慶州にて

朝鮮　正木柳建子

東洋一が多い新羅の舊都慶世へ女房と連れ立つて見物恰も奈良の都の樣で三笠山もあります何れも一千年前の小山の樣な古墳群の中に邑があり二里位先から古墳が見えます新羅始祖赫世居も四世脫解王も瓢箪を腰につけて海を渡つて來た新羅の總理大臣瓠公も日本人と云ふ事で愉快です兎に角傳說の多いのには驚きました新羅九百六十年の都城地然も千年前の事です遺物も珍らしきもの計りで佛國寺の石垣吐含山の石窟庵海拔一千八百七十尺日本海に面した山上にある東洋一の石窟、此内に此繪の樣な流麗な衣紋の彫刻があり一驚しました實に堂々たるものです、權衡の美肉体の美面相の豊滿等傑作中の傑作です、此石窟にも汗ダク〳〵で上つた譯です眼下の日本海の遠くの貴殿の健康を祈つた譯です、雞林の都佛の美しさ。

蔚山にて（其二）

慶長二年第二回朝鮮征伐も海軍の廢滅で負け戰となつた加藤清正が二萬三千人を使役して風雨を厭はず築城最う少しで出來上る時明將揚鎬軍四萬七千餘人に取圍まれ十二月二十三日から正月四日迄土を焚き血水を飲んで籠城した處で、築城法など内地ののと少しも變りません瓦は朝鮮風のものです兎に角糧食がなかつたので隨分苦しん

朱に染まり風呂の時間を決められる　同　新柳
裏長屋にも雛の出る日よ　兵庫　千帆
道樂が犬三匹の供になり　神戸　天昇坊
生活と離れすぎたてネオン燈　大阪　ぎさん
言つてみるだけの不平だ止めこう　同　宏朗
三越の紙古下駄も包まれる　神戸　青水
頼られてゐるとは知らず呑んでゐる　高岡　かずを
馘首になつたら二食にしよう　鳥取　源太夫

都ホテルにて

日本語で御所が見えるといふへ寄り　京都　相界
電話することを手枕思ひ出し　宮津　天街
煙草屋の借も出て來る卒業期　犬山　鍋人
惱ましき心も君の見ゆるまで　京都　水舟
空向けば煙突斗り煙　ばかり　神戸　不然
天体の謎を思ふて草に寢る　京都　丁路
洋服の色だけ娘見て戻り　大阪　なをみ
もう櫻ほころびさうな椽の先　同　黑天子
無理矢理のこころづくしよ汽車が出る　奚　落葉

だらしい味方は一萬三千人討死　二千八百明軍一萬三千の死人です　例のいかるが平治など奮戰したものです　正月二日毛利秀元黑田甲斐金吾中納言等三萬騎　四國勢二萬騎の應援があつて始めて　明軍が引いた今此城址に梅が咲き初めました　京城はまだ〜寒むいのに蔚山は暖かです、

銀甲きらめく當り梅が咲き

（銀甲は清正公の代名詞です）

蔚山から約十里餘りの　梁山郡の山中、靈鷲山通度寺に入りました　新羅時代の寺で約千三四百年前のもの　羅寺で　雲水達二百五十人今も住んで居ると云ふ盛な寺です　重修を重れ今の建物は　約三百五十年前のもの一度は災上した事もある　新羅の建物の風を存じて居るが　手法技術さつぱりで佛像も新しいもの計りです、　唯高麗朝頃の香爐三箇ある計りです　殿堂は相當大きく朝鮮三十本山の一です大雄殿（日本の金堂）に佛像なく入口が横について居るのも妙で、　佛像のかわり戒壇の大きなものがあるのも變です　大雄殿の基礎石は新羅時代のもので　彫刻の剛健なる蓮華紋が陽刻されて光つて居る　三重石塔と石燈（火袋の大きなもの）は何れも新羅代の結構なものです、　三里四方位老松茂り邑内より二十町で寺に達しますが　潺々として清冽な水が中央を流れて居るが　朝鮮には珍らしい、　これから東萊の溫泉にひたり梵魚寺へも行きます　そして釜山で柳友と會す豫定です。

通度寺は寶相苑文を相傳へ

柳の絮

長野吉高

（二）

遠く離れて見るべきものは、何も腋臭のある美女と限つた事ではない。猫庵君の家だつて此の範疇に入る。猫庵君の家は、一見ナイト式ぶりの建物だが、近寄つて見ると此れが安ものゝペンキ塗りの木造建なのだから恐入る。丁度、老婆が眉墨をひき口紅をつけて厚粧化した様な誑惑だ。

住宅を底邊に、三角形に庭を取つて、其の二邊に相當する周圍の所に名ばかりの竹垣をしてゐる。然し、少し大きな犬が小便でもひつかける時には、片足が遥かに垣の上方に出る程度。この垣に沿ふて道路、其の向ふは近々又家でも建ちさうな廣場になつてゐる。三角庭の中心には、竹で矢來を組んだ馬の鞍の様な、極めて無格好な圓門（ドウム）が造つてある。

ハムレットの傳説で有名なデンマルクのエルシノアから、コペンハゲンに至る海岸線は猫庵君に言はすと多様式な別荘の泡ださうである。一九二九年、二度目の渡佛中、何んでもクランペンポルプウと言ふ屁の様な名前の村で、或別荘の庭園にバラを絡ませたドウムが有つたのを見て馬鹿に氣に入り、歸朝するなり早速と其れを眞似て造つたのだと言ふ。時にバラが絡んでゐるかと思ふと何時の間にか朝顔を這上らしたり、糸瓜の蔓を巻きつけたりしてゐる。さうかと思ふと猫庵君のワイシャツの洗濯したのが引懸つたり、妻君の足袋が大穴を見せながら悠然と乘つてゐたりする。口の悪い雨軒居士が、ドウムを植物的に裝飾する事は、十八世紀末フランスに流行したロココ風の悪趣味だと言つても、猫庵君は一向平氣だ。平氣どころか内心は頗る悦に入つてゐるらしい。洗濯物を引懸けるのは妻君の仕業だが、此の不埒至極な行爲を猫庵君一喝するかと思ひの外、不思議と默許してゐるから面白い。猫庵君に言はすと、ドウムに洗濯物がひつかゝつてゐる事は、決してドウムの尊厳と美觀とを傷つけない、寧ろ矛盾と調和を兼ねて其の間に東洋流の大調和が有り、川柳味がある——と。

大調和どころの騒ぎではない。此の無格好なドウムの爲めに迷惑千萬な事がある。其れは、通りすがりの悪童連が、面白が

つてドウムを的に小石を擲げつける事だ。時々石が飛んでは住宅の板壁にガツン〳〵と當る。硝子でも破損されては大變だとばかり、妻君は躍氣になるが、猫庵君は詭辯を構へては容易に撤去しない。撤去どころか

日本には猫庵の家にもドウムあり

なんて一句ひねつて凉しい顏してゐる。猫庵君は此の句を大變に自慢するが、何んでも柳人の喧嘩坊の句に

駿河では芋畑にも富士の山

と言ふのが有るが、これに聊か暗示を得てゐる句と見たはひがゝ眼か。

此の問題のドウムの下での椿事が、猫庵君と雨軒居士をビツクリさしたのだつた。

書齋の窓から見ると、妻君が脂肪ぶとりの體を廻轉椅子の樣にあつちこつちへクル〳〵と廻しながら金切聲を張上げてゐるのだ。だが、猫庵君の眼に映つたのは、妻君よりも血まみれになつて其處に轉つてゐる一羽の雞の方だ。

「ヤア！」

流石の猫庵君も一寸辟易の態。

「また、やられたらしいんでございますよ。可愛想に——。何處のでございませうね。」

妻君は悲痛な面持。猫庵君は嘆息する。

「これは甚だ迷惑だなア。」

何種の雞か白毛の美事な奴だが、首が千切れて四邊は血だらけだ。

「これは——慘い殺方をやつたものだナ。」

雨軒居士は啞然とする。

「もう今度で三度目でございますよ。」

「三度目——。」

「二度とも、其の時は道路にあつたさうでございますがね。今度は所もあらうに、此んな所へ持つて來て——。」

妻君は内心おだやかならぬものがあるらしい。

「察するに此れは變態ですね。犯人は變態殺傷性ですよ屹度！」

雨軒居士が大いに博識ぶりを示すと、猫庵君始めて氣付いたらしく妙な顏する。

「冗談ぢやない。こりや犬かやつたんだ。」

「はゝア——。」

雨軒居士、窓から上半身を泳がして確かめる樣に雞を見直す。

「この界隈に性の惡い犬が居りましてね。雞ばかりを狙つてゐるのでございますよ。」

妻君は始めて說明する。

「犬ですか——成程。」

雨軒居士は急に默つてしまふ。妻君は困つた顏して猫庵君に言ふ。

「ね　これを怎う致しませう。」

「わざ〳〵ドウムの下まで持つて來るなんてごうゞ生意氣な犬

奴だよ。ごうむするかつてごうむにも恁ふむにもならないが——。」

「ご冗談は仰有らないで下さい！」

妻君は足摺りをして喚く。

「被害者の家へ死骸を引渡すんだナ。」

「何處の雞だか解らないではございませんか。」

「心當りはないかね。」

「ございませんよ。」

「困つたね。」

「怎うしませう。」

「さアね。」

埒がつかぬ。

「捨てるんだね、そいつを——。」

雨軒居士、名案の積りで言つてのける。

「至方がない —おい、向ふの空き地へ持つて行つて捨てゝ來てくれ。」

猫庵君の命令に、妻君は頑として應ぜない。

「厭やでございますよ。氣味の惡い——。」

「雞が怖いかね。」

「この雞は死んで居りますもの。」

「でも雞肉は好きだつたと思ふがね。」

「雞肉と此の雞とは違ひます。」

「同じだよ。雞肉だつて死んだ雞ぢやないか——。」

猫庵君は變な理窟を言ふ。

「くだらぬ事を言はないで君が持つて行き給え。」

聞きかねて雨軒居士は妻君に味方する。

「ちよつ！あの犬め——。」

猫庵君は今になつて甚だ口惜しがる。

澁々庭に出た猫庵君は、雞の羽を摑んで宙に吊しながら

「雌だね。肉が柔かさうだ。」

「美味よ屹度——。」

雨軒居士はすぐにこれだ。

「咬み傷が胴にもある——かうして死んだ奴を見ると餘りいゝ氣持ぢやないナ。」

「それご覽なさい。」

妻君、猫庵君に美ん事チクリと一針を打つ。

「何處へ捨てやうか？」

「前の空き地がいゝよ。」

雨軒居士は窓から頤をしやくる。

「いけませんよ、あすこには——何處かもつと離れた所がいゝでせう。」

妻君は此の提案には不服だ。猫庵君は四邊を見廻す。

「離れた所つて——さて。」

「向ふに雜木林がございませう。あすこが善くはありませんか。」

「やれく。致方がない——。」

猫庵君は、右手に雞をブラ提げて、垣を乘越して空地の右手からづつと續く雜木林の方へ行く。

（つゞく）

松村敏郎君を悼む

桑港　伊藤神山人

松村敏郎君名は馬場正二靜岡縣賀茂郡松崎町の產、大正二年に渡米され桑港に於てマクリー洗濯所を兄弟三人共同で經營して居られる其の一番下の弟である、川柳雜誌の熱心なる愛讀者であり投句家であつた、病因は胸のトラブルで永らく惱まされて居られた樣です、私が君に面會す可く工場の方に訪た時は病勢餘程進行して居たと見へて只に顏を出される事さへ稀であるこの話しであつた、二回目に訪ねて病狀を伺ふた時には就床の儘で夫人は終日終夜看護に勤めて居られるこの事でした、其の後柳友と共に病床を見舞はふとして居る內に突然死去の報に接しました。

米國では馬場眞似郎と稱して新聞紙上に盛に投稿して居られた川柳雜誌に私の姓名が間違つて記してあり、それを配達されたので態々尋ねて來られた其の時は私も病氣上り、君もまた健康を害して仕事を休んで居られたこの事でした、之が二人の初對面であつた、其の時の句に

目と鼻の間にあつて知らずに居　神山人

趣味としては川柳以外にはなかつた樣です、川柳に志されて日は淺かつた樣ですがなかなかの多作家で佳作も隨分多かつた樣です殊に

上着ぬぎまたチョッキぬぎ鳥の聲　敏郎

この句が愛誦となつて川柳雜誌に現はれた時には私に電話までかけて喜んで居られた。

一月三十一日桑港ウエブスター街二五三〇番の自宅に於て長逝された、葬儀は二月三日桑港佛教會に於て盛大に執行され柳友二名が代表して弔詞を述べた、行年四十四才、夫人慶子さんと二男がある。千九百三十一年三月四日

近作柳樽

ひろし選

燃え盛る焔に覺めし街の夢　銀花　螢ヶ池

母面會に來る

折角の鯛にすまない食慾よ　同　同

掛取の來ぬ生活もまた淋し　同　同

蕗の臺過去の女をおもふかな　たけし　近江

縫ひやめてレコードをきく春の宵　同　同

新妻の指あたゝき春の宵　同　同

婢に與へられたる灯の下で縫ひ　素生　神戸

儲かつて父をねぎらふ言葉が出　同　同

下駄揃へられ幸福を見て歸り　同　同

故郷の土へズボンの長い影　香川　三汀

風邪ひけば善人らしい聲になり　同　同

牛を賣る話場末の酒屋の灯　同　同

夢に來て幼な友らが泣かしゆく　螢ヶ池　愚籠

ひゝこの口氣にかけまいぞ賣春婦　同　同

マスクはづして溜息を捨てる　島根　麗函

朝の氣持に親雀子雀が居る　同　同

夢多き男に春の夕陽かな　螢ヶ池　唐夫

春の月ふつくらまろき美少年　同　同

選後感想

▽銀花君の句には病院生活がよく出て居る。「折角の鯛」は親子の情が切實に盛られて居て佳い。

▽たけし君は最近に結婚したので、誰でもが陷る甘い感傷から出て居ない。淘醉から覺めぬとほんとに妻をを眺めた句は生れまい。

▽素生君の「婢」にはひきつけられる句であるが、昔の日本派俳句式の調子がしつくりせぬ憾みがある。「下駄揃へられ」もいゝ句だが「揃へられ」に「見て歸り」と置いたのがぴつたりせぬ。

▽三汀君の句は だん〳〵調子がまとまつてくると同時に平凡になつて行く。この境地から一歩出る事によつて ほんものになると思ふ。「牛を賣る話」は疲弊しゆく農村を思はせる句。

▽愚籠君の「夢に來て」は讀むものも共に泣かされる句だ。「賣春婦」は同情的に咏まずもつと力強く叫ぶべきだつたと思ふ。

▽麗函君の「マスク」は原句「捨てるぞ」だつたが、少し強すぎると思ひ ぞ」を捨てた。「朝の氣持」には「が居る」が蛇足のように思ふ。

▽康夫君の句はいづれもローマンチックだ。だが「春の月」などやはり悪くはない。

▽桃水君の「手術待つ」には不安がよく出て居る。

手毬唄母縫ひながら誘はれる　神戸　桃水
手術待つ身寄ばかりで抱く火鉢　同　同
病む眼には寂しい父の姿なり　螢ヶ池　杜洋
一杯の粥に運命づけられる　同　同
齒車に或ひは心卷つ込ませ　大阪　童史
いゝ口もなくビルヂングを仰ぎ　同　同
逃避になれて血みどろな顏が來る　螢ヶ池　照夫
泥棒だつて妾には抱けてよ　同　同
片戀になつて煙突見直され　神戸　足帆
時計奴がはつきり遲刻にして仕舞ひ　同　同
踏切のガードに變る新開地　奉天　深太樓

伯父の死に

魂を恐れ氣もなく燒いて居る　須坂　道樂

商用にて出張

ズボンの皺もなほつた今日も働こ　大阪　一騎
やけくその樣に女給は唄ひ出し　京都　利郎
タンポヽの色に白痴の子にも春　大阪　千春
丸髷に勝手の違ふ手のやりば　大和　白帝子
爺さんよ婆さんよの一軒家　大阪　拓二
身につくやうなものが喰いたい　螢ヶ池　白眠
一切を忘れて貰ふ酒を酌ぎ　大阪　卯三
金庫へ入れる紙幣の皺を伸し　松山　紫石
細君の名宛で居く主婦の友　大阪　紅
御用聞きついでに郵便入れて呉へ　鶴ノ莊　普天
西瓜ならべた樣に給仕居る　大阪　一久
寢苦るしさまたもベットの位置を替へ　螢ヶ池　百萬石

▽杜洋君の句も淋しい句。
▽童史君の「齒車」は「或ひは」が一考を要するところ。
▽照夫君の句には階級的なものか多かつたが「逃避」は血みどろな顏の主が逃避になれて居ると、とられるとおかしなものになる。逃避は自ら逃げ避ける事であるから、こゝでは作者自身が、鬪爭から若くは現實から逃避して居るところへ同志が血みどろな顏で來た。ととるべきだが、言葉を煉る要があらう「泥棒だつて」も未完成な句である。
▽道樂君の「魂」は實感からの迫るものがある。
▽一騎君の「商用出張」九句もみな体驗だけに眞實なものがある。「今日も働こ」が一番生々して居た。
▽拓二君の「爺さんよ」白眠君の「身つくやうな」は單なる言葉のようだが、前者には飄輕さ、後者には眞實がある。
▽一久君の「西瓜ならべた樣に」素月君の「合戰のやうに」は共に初心者の一度は好む「やうに」であるが、「やうに型」にはめると句は作りやすいから、安易につくる癖をつけていけないと思ふ。
▽かずま君の「これが幸福か」は被搾取者の自覺だが、此程度ではまだ幸福から脱してゐらない。不幸はもつと心の奥のものにある。
▽とも坊君の赤靴は「赤土」を配したのが嫌味だが、郊外風景ではある。
▽瑾坊氏は在米の人。異國で吹く尺八の音を異國人はなんときくか。

（ひろし生）

合戰のやうに寒行やつて來る　大聖寺　素月
異性のほゝ笑み休火山に似て　大阪　吉祥
景氣よくタクシー捨てる戎橋　高岡　二朗
これが幸福か朝起きに夜業　大阪　かずま
腹の子へ胎教といふお說教　大聖寺　智惠子
失業は妻の誡に養はれ　大阪　一寛

明日退院と云ふ

親心許婚泊める事にする　大阪　愛緒
母を打つ拳へすがる子供なり　昊　醉仙
赤靴へ赤土がつく分讓地　大阪　ともゑ坊
尺八をふけどまはりは毛唐なり　來國　瑾坊
尼僧の目性の悶えを秘めてをり　大阪　青兒
小春日に好い木ですなとうづくまり　富山　馬慧
あの顏で親にまで嘘がよく云へた　大阪　水煙
こけついた飯に苦勞の下女の年　島根　夕陽
自惚もあつて白髮を染めるなり　大阪　天柳
かんてきを煽ぐ團扇が疲れてる　羽衣　松枝
幸福な夫婦はいつも日本晴　大阪　靜香
押し乍ら子をあやしてる乳母車　伊豫　春市

堂ビル麻雀競技會に赴く

うつかりと着物着て來たビルヂング　大阪　浮大盡
旅もさし苦勞もさせた子の出世　不明　露波
久方の便りの寫眞ふけてをり　大阪　詩郎
町裏に同志の一人病んで居る　不明　闘吉
送金に舊正月も程近し　大阪　葉光

游魚は死にました

といふ四月廿日の新聞廣告を見て私はハツトした。游魚氏は遊二郎と號する川柳人でもあつたし、路郎主幹とも「雪」を刊行されたりして親交があつたのだからそれらの事については私は書かないことにする。

游魚氏は實に私の俳句のお師匠さんであり、私にはじめて川柳をつくつてみたまへと云ふた人でもあるのだ。

明治四十五年頃氏が大阪日報（いまの關西日報）俳壇の選者をされて居て、病を得て六萬体町で靜養されて居た事があつた。日報俳壇の投句者であつた私が、はじめてお訪れして、席上野村木偶人、安江不空の兩氏と會ふて、「猫の戀」の題で作句した事を覺え居る。其後宗右衛門町の「多喜の家」に起臥されて居たが、其頃丁稚だつた私を可成りひきたてゝくれて、碧梧桐氏や生方畝郎氏と南の「日の出家」や、御靈の「福丸家」などに連れて行つてくれたものである。

氏が「多喜の家」を出て八幡筋に八萬洞を開店されてからも、よく話に行つた。ぽつり〳〵と折釘のように話をする人だつた。

川柳雜誌の句會へは、中野三允氏歡迎句會のときと、柳珍堂忌に來會された事がある。

「櫻の木の向ふの圓い山の夕陽」といふ氏の短册を眺めながら感慨無量のものがある。

（六、四、二〇　安井ひろし）

川柳鑑賞の立場

岩本素人

單に「はい」とか「へえ」とか言ふ極短い言葉の上にも其時々の感情が表はれるものである。人間の一擧一動には必ず場合々々の氣持ちが附いて出ないではをかない。又下駄や靴の踵のちび方にも其人々の個性或は癖の覗はれるものである。

假に非常に優れた宗教的作品＝宗教畫或は佛像の樣なもの＝に接した場合第一に觀者の胸を打つものは作品から來る崇高な感じである。それは作者の宗教的信念、敬虔な心情と言つた風な崇高な態度が作品を通じて觀者に追るのに外ならない。

書を見る場合でもそうである。立派な達筆だがどことなく下品な字と、左程にうまゐとは思はないがどこかに重みのある上品な字とある。書には人格が表はれるとはよく言れてゐる事であるがそれは書ばかりではないのであつて、人間の動作には一として人格と感情の表はれでないものはないのである。

人と人との間の日常事に於ては少しく鋭感な人は、相手の擧動に依つて人の腹の底まで見抜く事が出來るにもかゝわらず、これが藝術品の場合だと「そんな高尚なものは私共には解りません」などと平氣で言ふ人がある。又解つてゐないのだなと思はれる人々も少くない。

これは解らないのではなくて、解らうとしないのではあるまいか。人と人との場合は直接利害關係のある事が多いから勉めて相手の感情を讀まうとするから益々人を見る眼が發達して「大抵の人間は一目見たら解る」とさへ言ふまでに至るのであるから、畫や詩の場合でも「一目見たら作者の心持は解る」とまで行くのは何人にでも左程困難な事であるとは思はれない。

川柳の場合でも之れと少しも異ならないのである「川柳は解からない」とか「今時の川柳は面白くない」とか「川柳雜誌の句には解らないのがある」とか言ふ事を屢々耳にするが、斯ふ言ふ人達は川柳から作者の個性、人格、感情等を受取らうとはせずに、句から事件或は物語りを見出さうとするからではないかと思ふ。でなくば「川柳は面白ものだ」と言ふ先入主に禍ひされてゐるのであらう。

成程川柳には面白い句もある。だが面白いと言ふ事は決して川柳の生命ではない。人間の生活には面白い事もあれば悲しい事もあるこの喜怒哀樂樣々の感情を人それ〴〵の個性の間に句として謠うの

が川柳なのであるから面白いものもあれば悲しいのもあり、淋しい句も生れやうではないか。

川柳の樣な短い詩から物語を摘み出さうとするは全く以て無理な注文である。物語を求むるなら大衆文藝を讀めばよい。講釋を聞くもよい。活動寫眞を觀るは更に面白からう。川柳はどこまでも川柳であつて川柳の有つ味は假令之れを引伸ばして小說に書いても十年掛つて說明しても傳へる事は出來ないのである。川柳は不可說である。感じるより外に川柳を解得するてだてはないのである。

川柳を感じる事は味覺や臭覺などと同じで、口や筆では他に敎へる事も示す事も出來ないのである。酒の味は呑んで見るより外に知るすべはない。川柳は酒であり、おはぎであり、すしである。川柳は味である。

酒も茶も竹庵先生の水藥も色は同じだ。酒を味はずに白眼んでゐるだけなら藥でも小便でも差支へは無い譯だが、これを呑む事になると茶では腹ばかり張つていくら呑んでも醉はない。小便ときては鼻持ちならない。川柳にも灘の生一本と言ふのがあるかと思へば、茶や水藥や小便も混つてゐる。けれども味はない以上は只色丈け見たのでな判別が出來ないのである。

小便の樣な川柳とは、川柳とは下品なもの茶番の樣なものと心得てゐる或る種の御隱居樣連中の喜ぶ、假へば「さあ事だ下女鉢卷きを腹へ締め」「居候亭主の留守に仕候」と言つた風の句を指するのである。之れ等は狂句と言ふものか何と言ふものか私は知らないが、川柳では斷じてないのである。我等の唱へつゝある川柳詩ないではのである。鼻持ちならぬ小便である。次に水藥の樣な句とは、句を以て格言の代用をさせるとか、或は他に目的を以て作られたで句の形を採つたまでのもの「我がものと思へば輕き傘の雪」とか「もの言へば唇寒し秋の風」とか言ふ風なもの＝今一寸適切な句が思ひ出せないが＝で何かの病氣には利くかも知れないが詩と稱ぶ事は出來ないのである。

茶の樣な句とは句會の席上などで課題に附いて無理やりに製造した句や川柳を作らんが爲に作つた川柳によくある何等の實感を經ずして出來上つた句を指すので、見せられる方ではお腹ばかり膨れてうんざりする。或る種の柳誌などはこのお茶斗りだ。茶は上戸にも下戸にも向く加減か世間では案外斯う言ふ句が前受けがする樣ではあるが、言ふまでもなく實感の伴はない句は川柳詩ではないのである。茶はあまり呑むと毒になる。茶の樣な川柳ばかり見て居ると、川柳盲と言ふ不治の病になる。

酒は酒だがすぐに頭へ來る奴がある。此奴は實に左黨の敵だ川柳にも頭へ來るのがある。きざな川柳がそれだ。洗練の足りない句がそれだ。獨りよがりの句がそれだ。

酒と茶と藥と小便を識別するのは味つて見るに限るのである味はへばすぐ分る。いや口まで行かない内にぷんと來るからすぐ知れる。だが眺めてゐたのではいつまでしても解りはしない。川柳でも僞ものは必ずぷんとくるからすぐわかる。

酒の醉心地は惡くはないが、川柳の陶醉境も亦格別である。川柳は味ふものである。味つて醉ふものである。川柳は感じるものであつて讀むものではない。　昭和六、四、十二

一路集

（募集句）

スポーツ

森東魚選

一着になつてまばゆく寫される　紫石
ラクビーへ午後の日和が崩れかけ　沒食子
空風に補欠に寒いベンチ也　勝二
重役へあすのゴルフの電話が來　曹天
スポーツの話に給仕負けてゐず　哲郎
指定席スポーツマンに嫁くと定め　白柳子
大臣になつてスポーツなども知り　明珠
スポーツの記事だけに子の用がある　吐句坊
ランニング人見絹枝と直ぐに知れ　不然
日曜をゴルフに定めたいと暮し　千帆
スポーツの映畫あぶないと勝ち　禮二
數萬の片唾飛球に終りけり　光路
スポーツへ理解か出來た後援費　湖山
ラクビーの汗に若菜の薫るなり　桂枝
セコチャンの儘で卒業近くなり　麈耶火
スタートがプールにうる肉体美　不仙
春や春スポーツ欄の賑かさ　白雨
スポーツに理解もあつてい、課長　耕民

スポーツの喜雨と思ふと腹が立ち　青水
延びていく球へ觀衆わきかへり　落葉
スパイクを枕邊に置く明日の夢　長二郎
スキーの子町迄用に使われる　蛙皷
塀外のキャッチボール（氣笛鳴り）　卯三
ユニホームの中の吾子は見當らず　日日城
卒業は卒業主將淋しがり　暢山
萬歳へ主將涙の首を垂れ　利生
傳令がピンチバッタの耳へ來る　同
ホームラン拍手を浴びて水へ來る　錦水
六疊がグランドになる賑やかさ　同
太陽をにらんでエラーくやしがり　松枝
運動の選手の點に無理があり　同
スポーツの姿で出前やつて來る　素月
威嚇する爲のバットを振つて見せ　同
白線と白球空は蒼くすみ　巧笑
ラケットを手に重役も若返り　同
遠來の選手へ別な拍手なり　奈緒美

續川柳家の戸籍調

◎　係　山雨樓

（一）姓名（二）雅號及別號（三）出生地（四）現住所（五）生年月日（六）職業又は勤務先（七）好きな句（八）自信の句（九）川柳以外の趣味（一〇）配偶者及子供の有無（一一）嫌ひなもの（一二）川柳に手を染めた年月

（256）　木村小太郎

（一）木村信太郎（二）小太郎、草紙亭（三）大阪市（四）大阪市東成　勝山通七丁目四三五（五）明治貳拾參年六月壹日（六）株式會社野村銀行（七）雨舍りゴーンと撞いて叱られる（古句より）夜店出しのその座滿團も懷しい（番傘二十の三より五葉氏の句）（八）酒めしの障子の前に富士が晴れ（九）淨瑠璃、旅（但し旅らしい旅をする機會あまりなし）（十）妻あり、二男一女あり。子供の名　五郎（七つ）昭子（三つ）陸郎（一つ）（十一）べんちやら、市電（十二）大正八年七月頃。前掲自信句はその頃のもの。

（257）　瀬良楠堂

（一）瀬良喜久男（二）楠堂、俳句では青也、短

ユニホーム姿へ若草のもゆる　同
スポーツへ唯だ默々と陽は燒けて　魚郎
スポーツの理解へ二人そひごげる　同
スポーツの空へ淋しい松葉杖　有爲郎
初仕給スポーツマンといふ話　同
スポーツへ感激を持つ許婚　白帝子

塲末

おむつくゞつて塲末の我が家　方眠
寗末から働く街の空の雲　繁坊
沿線の塲末危なく子が遊び　落葉
車庫行の電車が通る塲末の夜　こも坊
飯を炊く子供を見たり街はづれ　愚寵
敷島が塲末の店に腿せてゐる　青水
不夜城をよそに塲末は寢靜まり　耕民
生きて行く道を塲末で教へられ　珊瑚樓
巡査部長になつて塲末を引揚げる　双車
灯のいろが垢染んでゐる塲末なり　進一郎
醉ひごれの眞似も上手な塲末の子　忠彌
せめても空氣をほぐす塲末に居　英賀夫
親と子と七輪と居る塲末の夜　水馬
芥捨塲から續いてく塲末町　麿耶火
霜やけの女が通る塲末街　今雨
板屋根のペン〳〵草にある塲末　白花子
黄昏の塲末を戻る靈柩車　桂枝
塲末の灯物憂く雨にぬれてゐる　哲郎
塲末から通ふサラリーマンのはれ　日々城
終點に近し塲末の灯が搖れる　湖山
御宿と塲末に暗い灯が這入り　光路
塲末町蛇も出ますと笑つて居　虚白
スポーツも少しは出來る婦人記者　同
競漕をバックに夏の戀があり　民郎
スポーツへけなげな母こたつやり　同
ホームランだけ知つてる子を誘ひ　同
軸吟
そいつもうシャンで女流のダイビング　東魚

松丘町二選

家も疊も妻もくすぶて居る塲末　勝二
傷らぬ人の姿を見る塲末　卯三
電車から見れば塲末のちぐはぐな　泉流
やけ酒ものめずかへれば塲末の夜　不路子
見きはめのつかぬ女もゐる塲末　おさむ
あなごれぬ繁昌みせてゐる塲末　沒食子
萎びたる蜜柑塲末に並べられ　青兒
こび〳〵に國旗が立つた塲末なり　菊路
公設が出來たばかりの塲末なり　繁堂
あらたまる塲末の言葉つきをかし　明珠
バラックに寢かすに惜しい娘なり　涼哉
マーケット塲末の客を大事がり　三代吉
煩悶を塲末の戀にすくはれる　杜洋
震ふ手で拾ふ塲末の霜の錢　民郎
教會が出來て塲末を驚かし　右月
ジャズも女も塲末の街らしく　翠夢
遠出して歸りし塲末ちと變り　町子
孝行がゐさうな塲末の町に住み　吳柳
人間のまこの心見る塲末　竹水
のうれんを塲末の方へ別けてやり　新柳
風呂屋ばかり繁昌するも塲末なり　かず子
世に拗ねたやうに塲末に蓄めてゐる　蛙皷

歌では菊郎(俳句短歌はもう四五年使つたことありません)(二)愛媛縣松山市(四)東成區西今里町三番地ノ一(五)明治三十三年十一月十一日(六)エンヂニーア本年一月より涙人(七)亡き師而笑子翁の句「文金の一糸亂れぬ三ヶ日」(八)昨の自信句今日は駄句となり今日の自信句何時迄自信句たり得るや——で未だ一句もありません(九)尺八但し首振り三年程度、野球(一〇)妻と子供合計三人(一一)大正六七年頃と思ひます。

(258)　川上旅雨

(一)川上吉藏(二)旅雨、別號無し(三)廣島縣佐伯郡大柿村字小古江(四)神戸市入江通八丁目八十三(五)明治卅年五月十七日(六)神戸新聞社工塲活版工(七)怠け者そんな譬は知つてゐる(紋太)春の宵ラヂオは固いことを云ひ(睡花)東京のどの邊と聞く懐かしさ(嶺月)(八)孝行がしたい土産の神戸肉(九)酒、他はどうでもよし(一〇)妻あり目下姙娠八月(一一)モダンガール、モダンボーイ(一二)關東震災直前ごろ横濱にて。

(259)　阿形一杉

(一)阿形道一(二)一杉、吾亦紅(三)大阪府泉南郡東鳥取村黑田(四)同上(五)明治三十五年五月十日(六)南海鐵道運輸課(七)「夕櫻と

塵末でも我家のあるを幸として　美和子
塵末から街の巷の戰線へ　天柳
十一文足袋の捌けてゐる塵末　青水
塵末からスピード増したバスの搖れ　千帆
泣聲にも馴れて塵末に病んでゐる　六華
塵末に住んで塵末に繪を描いて　圓角
子供には塵末は遊びいゝ處　道樂
遠吠えが聞えて塵末更けてゐる　有爲郎
蠟燭を立てゝ塵末で何か賣り　裸人
街外れ野良犬俺を嗅ぎにくる　沙門
甘言に知らず塵末の宿に着き　和笑
怖い眼を自動車で來て知る塵末　白柳子
煤煙と塵と子供と居る女房　白帝子
蛙鳴くことを塵末の手柄にし　狂水
塵末街賣屋の肥えて憎がられ　ひさし
白粉の女もふへて塵末町　同
塵末の子二部教育を卒業し　百萬石
何も彼もわきまへ居る塵末の子　同
佗住居塵末の風をきたながり　魚郎
辨當ガラ塵末の夜へ戻つて來　同
小鉢物いろ〳〵塵末灯が點り　靈壺
白壁にかゝはりもなき塵末の灯　同
朝市へ塵末の土を落しこき　白雨
何をする人か塵末の門構え　同
煙幕のやうに塵末の砂ぼこり　奈緒美
牛車塵末の風に追はれて來　同
母一人塵末に書を縫ひ續け　可奇
もうこゝら塵末と知れる軒並び　同
今日も亦一軒起きぬ塵末なり　義郎
その頃の朝は塵末に始つた　同

工塵の笛が塵末に呼びかける　木馬
無産黨のビラから塵末らしくなり　同
南吹いて寄席の太鼓が鳴る塵末　雅幽
なるやうになって塵末の酒場に居　同
塵末街に伸びし木の芽の空を突き　吉絃堂
薄暗く雨の塵末に粥を煮る　同
其筋にちと睨まれてゐる塵末　千春
警官の眼に塵末の灯暗すぎる　同
塵末から物凄いビラはり出され　愛緒
夕陽だけ隅までゞく塵末の家　同
煤けたる鶏が塵末を朝にして　沐天
思ひ出をかこう塵末に三味を抱き　同
追憶は花響の日の塵末　同
同じ色に塵末の空も日本晴　相界
湯屋だけに夕陽殘つてゐる塵末　同
溝の香に馴れて　末の通勤路　同
物干の朝へ塵末の煙が來　二南
口入屋外は塵末の人通り　同
塵末の娘化粧くずれのまゝ歸り　同
贅澤も云はず情婦は塵末にゐる　同
東西屋塵末で三味の糸が切れ　同

佳句

塵末艶めいて櫛が落ちかゝり　吉絃堂
溝板が浮いて塵末は今日も降り　和笑
頬骨は高く都會の端に生き　不然
夕方の塵末はどこも父が居り　奇可愛
塵末から見出されてきて女なり　暢山

人

朝の陽を待たず塵末は動き初め　白柳子

んぼがへりがして見たし　路郎（八）母と來てさびしそふなる梅の苦一「戰友の墓は南瓜の花ざかり」（九）野球、園藝（一〇）無し（一一）コンクリート（一二）昭和二年の暮から

（260）　横山勝二

（一）横山勝治郎（二）勝二（三）東京日本橋（四）奈良縣吉野郡下北山村池原（五）明治拾九年五月（六）土木技師（七）「雪の灯の街の隅つこで哥澤」溪花坊「チンポコを出す子よママちやんお留守なの」路郎（八）「十八の娘こはゼに無理をさせ」（九）見るもの聞くもの讀むもの皆好きですが今の山の中に居るので諦めて居ります（一〇）今は獨ぼつちです（一一）廻りくどい話と涙花節（一二）昭和四年一月より。

（261）　西村明球

（一）西村市造（二）明球、市公（三）大坂市生玉前（四）神戸市三川口町三丁目一九〇（五）明治三十一年六月七日生（六）神戸川崎造船所電氣設計部（七）ピアノが鳴つた金借りに行け（路郎師）（八）慰める人へ涙が落ちるもの（九）野球、旅行（一〇）病妻と子が二人共に男（一一）あまりかしこ過ぎる人（一二）昭和三年頃の紋太氏選神戸新聞柳壇、句會は昭和四年夏青明忌より。

地

駄菓子屋の店に蠅だけゐて眞晝　三碧

船客

◇　亂耽　選

出帆のドラも淋しい一人旅　利生
養生の頃なつかしき沖を過ぎ　哲郎
船客の二人へボーイ遠慮する　魚郎
勲章のある船客へ親めず　二南
海原を歸る心に往く心　青水
寢ころんで船と波とに乘りつゝ　天昇坊
港出たここで船客酒を出し　播州
船客へデッキゴルフの空が晴れ　沙門
思はざる名士と船で口を利き　耕民
船室へ殘されたのは謎の品　白雨
氣晴しのデッキは水と青空と　天柳
朗かな顏で船客おりて來る　清光
行先の同じ船客よく喋り　千帆
船客へ搖れる所で飯が出る　繁堂
もう港ですと船客荷をまめ　龜坊
大阪大阪に追はれて船客　周波
通譯のゐる船客に握手され　沒食子
傳說の海を船客怖く見る　可章
の色ばかり船客日をかぞへ　方眠
白金の水平線へつゞく旅　吉絃堂
船底に蠢く客の眞赤な眼　沐天
まだ知らぬ故國へ船のやるせなさ　同

秀　逸

月の出をほめて船客影を消し　紫石

選後に—このフレシュ味のあるものが殆んどなかつた事が殘念である。

◇　新水　選

新婚の輪投げへ波も靜かなり　長二郎
船客は廣のやうに迎へられ　吐句坊
新歸朝甲板上で寫される　今雨
船客の集ひ希望の新天地　松枝
同船に話たいやうな娘がゐる　吳柳
船客の數ふるばかり波淋し　南陽
船客の何を買つたかひやかされ　摩耶火
船客の女一人を危ぶまれ　銀水
航海の一夜は故鄕の夢に明け　菊路
見送りの聲とは別な波の音　湖山
船客の心安さも岸邊まで　一久
波の音ばかり船客日をかぞへ　方眠
のんびりと富士を見た船を待ち　憲坊
船客のその雄辯をよろこばれ　日日城
スクルウの音に寢られぬ客となり　素月
船客の皆んな寢入つていゝ月夜　巧笑
波高くなつて餘興の客が減り　桂枝
船客の一人馘首で戻るなり　雄花坊
船醉の入港時間だめを押し　紅
船客へ不氣味な雲が走り出し　沒食子
甲板で持つたテープの空へ飛ぶ　朋晴
船客の今日は變つた飯の味　英賀夫
乘り込めば寢ると決めてる船の客　紫石
船客へもう霞んでる竹生島　泉流

天

葱畑が忘れたやうにある塲末　沙門

住田亂耽　朝田新水　共選

（二十二頁より續く）

だが川柳の如き最短詩に於ては、小說理論をそのまゝ拉し來ることは愚かであるその表現に際して、たつた十七音字の言葉しか與へられない川柳詩人が、現實に迫るためには美とか眞理とかを賴りにせねばならぬとは川柳作家の宿命なのだ。亂耽君も指摘した通り、素材露出症に犯されることが何も川柳現實主義ではない藝術上の現實主義とは、心の中にあると外にあることを問はず、特殊風景に對する誠實主義以外のものを指さぬ。かゝる時十七音字ぽつきりの言葉（それは實に言葉の破片に過ぎぬ）を握らされた川柳作家の、特殊風景に對する誠實とは何を意味するか。最早說明の要はあるまい。凡そ川柳に於ける客觀的、主觀的、感情的理智的等々の尺度を以て、浪漫主義、神秘主義、象徵主義、唯美主義等々の符牒をつけることは無用であり意味をなさぬこれらはたつた十七音字の言葉が現實に

朝夕に同じ顔あり渡し船　古温
船客の一人が見せる隠し藝　卯三
船客へ碎氷船の音がする　右月
退屈を寢てまぎらはす船の旅　翠夢
船客の晴れ〳〵語るチイータイム　普天
氣に足らぬ顔なり渡し舟の客　鯉友
口下手はケビンで一人ほつこんれ　洋々
インテリも時化に金刀比羅拜んで　白花子
デッキから祖國の山に誓ふなり　利生
船旅の無事を祈つて仲がよし　哲郎
船客の或は高き話聲　奇可愛
船客の眼にもごかしき港の灯　吉祥
夢を持つ一家雄飛の船に乘り　落葉
同船と彼れとはつきり差別知り　夢裡
船客へ搖れる所で飯が出る　繁堂
船客の眼に不可解な人が居る　白雨
さまざまの智識を載せて船が着き　耕民
甲板へやはり三等客であり　沙門
花嫁の船出母へのテープ切れ　天舞坊
船客へ燈臺の名がわからない　禮二
永久にさらば日本よ移民船　虚白
海と空船客太く息を吸ひ　いわを
船客へ樂しく春の日と遊び　清光
鞍替の藝者と知らず定期船　勝二
もう港ですと船客荷をまとめ　龜坊
花束と喪服を圍むAデッキ　靈壺
三等の船客少さく座りこみ　町子
階級もなく見得もなく船に醉ひ　可章
船客の上陸を待つ髭を剃り　民郎
船室を出でぬ二人は僞名なり　三碧
何處へ行く此の船客の眼の凹み　沐天
船客へこゝの港の祭の灯　明珠
皆かなり醉ふて花見の船が着き　涼哉

いそ〳〵と解舟へ降りる船がつき　錦水
人種とは別に船客打興じ　有爲郎
行先の同じ船客よく喋り　千帆
船室へ思ひ〳〵の席をとり　青水
初めての汽船デッキにばかりゐる　こも坊
船客の我が子が偉ふ見えて居る　二朗
甲板へ出れば景色を褒めて來る　六華
船客は互に別な懷しみ　多朗
タラップに足が震える女客　不然
船客の誰かは知らず泣いてゐる　道樂
船客へあまりに無事な日が續き　魚郎
白金の水平線へつゞく旅　吉絃堂
船客の飲まず　はずに寢てばかり　木馬
大望のある船客へドラが鳴り　二南
船客へボートは心強く垂れ　同

佳句

船客の故郷互に花が咲く　吉祥
妻も子も屋敷も今は船の夢　奇可愛
船客の夜圍樂の中に明け　日々城
故國見乍ら檢疫のもごかしさ　三碧
碇泊をしてそれきりの人となり　白雨
船醉ひに女の肩が崩れてゐる　吉絃堂
見送りのないも上甲板に立ち　木馬
手荷物の巾に寢てゐる船の客　同

人

知りあへば苦勞ばかりの船の旅　光路

地

眞黑な海へ船客唾を飲み　素月

天

勳章のある船客へ親しめず　二南

軸

渡し客その退屈へ猿廻し　新水
船客のたゞ噸數を喜びて　同

迫るために、たつた十七音字の言葉が現實を孕んで詩と呼ばれるために、云ひ換へれば自分の言葉を以て自分の言葉を貫くといふ美しい悲劇を演ずるための衣裳に過ぎぬ。

創作奬勵 懸賞川柳發表

「靴下」

麻生路郎選

一等

高松市鹽屋町　鶴尾蝸牛

戀を見つけに靴下を汚すまい

二等

大阪市港區鶴町三丁目　西村山月

春風を切る靴下の銀の色

二等

大阪市此花區上福島北一丁目　今井菊路

靴下を穿いてもみずに六十二

三等

大阪市港區五條通二　福原トランク

宅は銀行ですの靴下干してある

三等

函館市元町三五　辻多一郎

採用ときまり靴下買ひに出る

三等

大阪市外阪急沿線服部　丸島利生

總踊り靴下半分混つてる

佳作

怒つてる妻靴下を編むばかり　金澤　森高旭虹

靴下よお前も虐げられてゐる　廣島　大山露斗

靴下をずらして通る汽車ごつこ　大阪　長谷川一徹

靴下をぬげばやつぱり下駄の足　東京　村野救命

靴下も穿かずに來るが出來る子だ　大阪　櫻井圓角

義足にも同じ靴下穿かされる　大阪　内村樹光

靴下が片足ずるも可愛らし　兵庫　戸倉晋天

靴下でこはゞく通る奥座敷　金澤　池田殘月

安くない靴下だぜと繕ろはせ　大阪　谷本柳精

靴下の穴も憐れに賴みごと　奉天　田中連樂

○

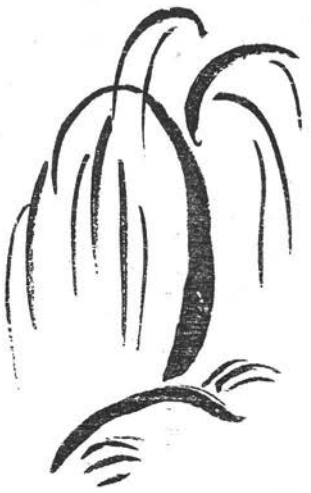
靴下をよる手が冷えるアセチリン　萬吉
飯を炊く間に靴下を乾かしぬ　志郎
儲つた話靴下ぬぎながら　正巳
宴會のたびに靴下買ひに行き　繁坊
靴下に感じる戀のこそばゆき　幸子
つくらつた靴下に豆二つ三つ　暢山
毛深さを絹の靴下かくして居　不路子
靴下の纖ぎプチプルを意識する　登美坊
靴下で立つ段通の音もなし　柳甫
痴話けんか未だ靴下を穿いた儘　奇可愛
妻の手になる靴下のながみじか　光路
頼まれた靴下ですと手内職　ひさし
手を入れてみて靴下の新らをはき　哲郎
貰うたが因果靴下だけ目立ち　十四九
探してた靴下も出る鼠の巣　大夢子
寄つて來る子へ靴下を半分脱ぎ　綠之助
紳士用と言う靴下へ立つて見る　虚白
靴下を脱ぐ嘆息を子に見られ　白眼子
靴下も脱いでしもうた足相撲　夕鐘
ぬくい日は靴下なぞも編んでゐた　俊一
ゆくゆくは絹靴下を買ひて與へん　隆彦
酒のむは易し靴下やぶれて居　方眠
靴下の方へ子守は足袋をはき　憲之助
さアく〳〵と母は靴下はかすなり　春秋

靴下の丈夫さ念をおして買ひ　計加
靴下をぬがさず子供まとひつき　狂司
靴下の口で見分ける敵味方　拓二
靴下を濡らしボートへ乘りうつり　沒食子
集金の後家靴下をはいてゐる　縫子
靴下の足を女は寫される　魚郎
靴下のまんま子供をだいて出る　こも坊
靴下を出させ三面記事を讀み　靈壺
水引のまゝ靴下の冬を越し　秋無草
靴下を一つ穿いては逃げ廻り　夢裡
靴下へ血がにじんだで泣き直し　洗塵
靴下が泣いてゐさうなモガの脚　誼子
チグハグの靴下穿いて兒は達者　紅
潑剌として靴下の穿き心地　新水
靴下を買ひ會見の通知待ち　鯉友
落ちつきなはれと靴下をぬがし　掉二
靴下のまゝお座敷でしびれきれ　周一
へちまにも似し靴下が竿にゐる　吉祥
靴下を脱いで嬉れしい横座り　志洋
母の筆靴下も送り置き候　吼城
靴下の丈に娘は立つてみる　日日城
靴下をものうささうに脱いで膳　鳳石
靴下へ朝の廊下の冷えを知る　清子
靴下のつづくりだけは嫁のもの　鞍馬
官給の靴下と見え惜氣なし　錦水

靴下が春の買物から覗き　桃水
長靴下は振りながら穿く　摩耶火
叱られて靴下はいたままにねる　量子
靴下をはかす間妻の注意事　雨聲樓
マネキンに似せて靴下白ときめ　鶴郎
戀人が靴下までもほめて行き　宏朗
靴下の派手ながラグビ敗け相な　二郎
立ちかけの坊に靴下はこばせる　變人
モガの靴下にも照る日曇る日　雅幽
靴下の下駄は鼻緒の切れたやう　柳秀
サービスだなぎゝ靴下一つ吳れ　虹一
遠足の朝を靴下一枚穿き　明果
氣取つたモガよたこ靴下落ちてくれ　星光
靴下がづれて女生徒後になり　柳民
靴下の穴もつがわず勤めの身　道樂
靴下を脱げばきれないな兄の足　雪峰
靴下を脱ぐダンサーは妖婦めき　有爲男
毛深いのよと女靴下脱いで見せ　愛緒
靴下のつくろい輕く忘れられ　如空
靴下をスチームで乾す一人者　義郎
靴下をはかすにも下女骨が折れ　機見女
靴下をこれば子の足冷へてゐた　文醉
靴下の冷たく水が廻つて來　石松子
人絹で光らしてみせるモガの脚　白花子

各地柳壇

——れ創を句るあちのい——



本社四月例會

四月二日夕　於端の坊

裏切つた女綺麗な春の宵　萬よし

そゞろ心も浮きたつ一刻千金の灯ともしころ「あしべ踊」のぼんぼりが道を染めると一入人いきれのする浪花情景。句會も春のなごやかさ、人人人……の盛會に會場は狹隘を感じて來る。久方振りの革郎氏、松山から歸つた素人氏夫妻の珍客に、病氣全快の路郎氏が元氣な顏を見せる。閉會十時四拾分、終始緊張した作句振りである。今月から下足番を置くことになつたので參會者に好感を與へた。

（出席者）—路郎先生、おさむ、双車、鶴峯世紀、愛緒、みつる、水車、豆秋、亂耿、愚陀、あや美、機見女、忠彌、夢裡、英郎、二南、明暗子、麥魚、麥角、萬樂、夕鐘、琴人、華水、草樂、綠雨、山雨樓、宏朗、讓次、主税、奇可愛、南陽いわを、清郎、泉流、沐天、四五磨、雅幽、竹水哲郎、柳次、さだを、山抱子、はるを、雨町、羽水、涎湖、かほる、里十九、素人、武子、華郎（二南記）

席題　踊　互選

阿波踊り見て居た方もくたびれる　山抱子
太い足あれがダンスと言ふのなり　水車
都踊ひき茶を配る妓を見つめ　主税
少うしは踊る自信のある女給　琴人
レビューがふと憂鬱になつた彼　哲郎
都おどりから京の春　涎湖
踊れ〳〵逢ふ世界だ　豆秋
踊る子の口紅ばかり眼にのこり　夢裡
ゆき遲れ踊の中に背が高し　山雨樓
知つた妓を見つけた踊暮になり　柳次
通譯を連れて踊りへ乘りつける　麥角
かぶりつき踊子の眼を又感じ　愛緒
ネクタイは踊りつかれたゆがみ　南陽
洋服の踊り疊がすべるなり　雅幽
踊り子の此處から先は知らぬなり　いわを
踊り方變へてもみたい師匠のの氣　同
踊つては疲れ飲んでは疲れ　四五磨
踊の手一つ二つを出ししぶり　同
踊子の脚を照明追掛ける　明暗子
照明の伸び切つてゐる總踊り　同
踊りから一人はなれたみかん水　萬樂
ありふれた型で溫泉場の踊り　同
ひと踊り濟めげさかづき五ツ六ツ　鶴峯
踊るのに相手をひつこ抜いて出る　同
足上げるだけレビューへ名を列ね　麥魚
揃はない一人が目出つ總踊り　同
照明のある踊子は無駄がなし　二南
踊から歸る旦那は年を聞き　同
天才の踊大人に圍まれる　同
ダンサーの踊り疲れて飯の味　夕鐘
踊子のつゞみ打つ手で戻つて來　同
踊の中へせいろそばがとゞいてゐ　同

席題　事件　山雨樓選

散髪屋今日の事件へ首を出し　二南
事件だけ拾つて朝の飯が濟み　世紀
あの事件聞へば女給の笑ふのみ　沐天
夜が更けて事件の鍵がちよつと見え　革郎
事件にもならず初戀忘れて居　はるを
失策と知らず事件になつて居　綠雨
事件の主は悠々閑居　宏郎
交番でさばく事件は小さすぎ　麥魚
何事ぞ右往左往の劍の音　奇可愛

大事件埃のあとを見るばかり　主税
落着の事件へ折の出ると云ふ　愛緒
事件がすんだ警察署に月　愚陀
事件があつてからの繁昌　さだを
三面を事件でうめる淋しさ　四五磨
一寸した事件も父は座をはづし　里十九
事件のなかば娘ひよこり戻つて來　夕鐘
事件と見てマグネシュームをつめる　同
事件から炭焼小屋へ寫眞班　華水
大事件署長の釦とれてゐる　同
人事課に來て結局はなだめられ　双車
交番で昂奮してる朝鮮語　同
妻子憶ふて事件ながひぐばかりなり　雅幽
刑事煙つて彼の事件此の事件　同
ステッキつつつきあふて居る事件　同
鑛山に事件があつた夜の嵐　亂耽
複雑な指紋が跡を追ふ事件　同
タクシーが峠へ消へた日の事件　同
(五)事件なぞ知らないように寢てる村　譲次
(同)新聞で知つた自分の社の事件　麥魚
(同)嘘ついてからの事件が延びて行く　二南
(同)見たぜ云ふ人へ事件は元氣づき　山抱子
(同)事件から旦那はきつい色眼鏡　夕鐘
(人)事件とは別に水道越してゐる　かほる
(地)春雨を號外の鈴のかき亂し　明暗子
(天)算盤とペンへ事件のおもしろし　萬樂
(軸)爆發のさわぎに暗い夕御飯　山雨樓

席題　特　典　　雨選

特典の文字は大きく書いて　無事
特典は愚痴云はずに生活苦　沐天
特典があつて遲刻に馴れてゐる　四五磨
夢裡

特典へうれしい涙の日がつゞき　武子
特典へ女女の氣は揃ひ　柳次
簡單に父特典をくさして居る　愛緒
特典に家の時計が進んでゐる　かほる
特典と別に會社は儲けて居　山抱子
特典をもつて轉勤だけで濟み　主税
特典は優等生へだげのこと　泉流
特典のそれからそれへ出る夜店　宏朗
特典は金持だけのものであり　革郎
特典の前で二三度さはつてみ　英郎
特典ふと買ひたい氣もおこり　譲次
特典の樣に火鉢を抱へ込み　双車
(佳)特典へ金のないのが懷手　明暗子
(同)特典へ酒が呑みたくなつて來る　かほる
(同)特典に小さな疑ももつてみる　譲次
(同)特典へ羽織の紐をひれつてゐる　山雨樓
(同)さくら咲く春、特典のあがたく　武子

席題　坂　　二南選

坂迄は水一適も飲まざりき　いわを
三味の鳴る坂板石をはすに敷き　かほる
後押しが一緒に止める下り坂　山抱子
坂に來て女あまえる氣がおこり　双車
下り坂もうドン底に近くなり　世紀
坂道にほつそりラムネ賣つてゐる　豆秋
たまさかに神戸に行けば坂ばかり　鶴峯
大望へあまりに坂の多い道　麥魚
舊友を連れ公園の坂の春　亂耽
坂道で女はあとへあとへなり　里十九
坂道を斜に豆腐屋呼び込まれ　明暗子
坂の上去年と同じひやし飴　萬樂
月を踏み坂を登つて坊に寢る　麥角

ルンペンの腕組んでゐる坂の下　同
(人)嬉しさは坂にかゝつて知つた人　夕鐘
(地)坂を越えても手をはなさない　里十九
(天)母親と別に暮して坂を下り　かほる
(軸)履歴書へ坂平凡に暮れてゐる　二南

席題　安　物　　互選

ラッシュアワーそこに安物見付けた　英郎
女房の手に安物が持ち切れず　萬樂
安いものぢやが一べん思案する　里十九
止まる時計へ金平糖を入れておけ　愚陀
安物と言はず風呂敷ひろげたり　綠雨
どうしても買ふ氣になれぬ懷手　柳次
安物を買ふて歸つた茶漬飯　雅幽
安物を安物と見て買ふて來る　明暗子
安物を漁り疲れて食堂へ　機見女
安物のこの幌馬車に夢のせて　譲次
安物のこれまでもてたのが不思議　双車
安物をやたらに褒める女が居　山抱子
安物へよそのネオンが映るなり　亂耽
安物のシャツにもボタン付けてあり　忠彌
安物をことさらしく透かして見　山雨樓
俄か雨一番安い傘を買ひ　南陽
安物の方へは別な世辭を云ひ　涎湖
安物を買ふのになれて連れが出來　愛緒
安物の布團に淡い旅の夢　宏朗
安物の下駄で夜店を廻つて來　主税
安かつたことは忘れて不足言ひ　豆秋
安物へ買へぬ近所の目が光り　琴人
解しあふた安物の世帶です　同
安物のこんなとこからほころびる　夕鐘
安物を買ふのに年增ひまが入り　同

安物を見てゐる毎の袖を引き　華水
安物で承知の出來ぬ妾の子　同
安物の當奬つて出る百貨店　水車
安物も光つて居ればそれでよし　同
晴着やう〳〵安物と氣付けり　さだを
安物で諦らめて置く妻になり　同
安物を買ふて亭主に叱られる　沐天
安物の着物の中に子が肥り　同
安物も承知時代が斯うさせた　同

兼題　鍵　路郎選

解決の鍵をあたへてくれた夢　不路子
鍵一つホテルの部屋の明るすぎ　華水
鍵かけたように見せてる女兒　里十九
鍵かけたものを留守番預けられ　麥魚
覗きたい奴は覗けと鍵の孔　おさむ
留置場鍵の秘密も敎へられ　泉流
支那鞄鍵を大事に奉公の身　四五磨
養子まだ觸らぬ鍵のあるのなり　夕鐘
鍵一つ失くした事でもめてゐる　いわを
會計は鍵の夢をば見つゞける　革郎
鍵は鍵金はどん〳〵減つて行き　明暗子
鍵懷ろにして春の宵を出る　山抱子
鍵かけた部屋に幻狂ふのみ　愚陀
三代の鍵を握つておちぶれる　觀月
生殺の鍵握つてる支配人　夢裡
しかすがに鍵に觸れたき心なる　亂耽
新妻も同じ鍵を持つてます　あや美
かぎかけて出たのは隣り知つてゐる　双車
ぼけつぢにアパートの鍵ぬるく觸れ　はるを
鍵一つ財布に眠るばかりなり　雅幽
錠前がピシヤンと開いた面白さ　哲郎
預つた隣の鍵へ夜が更ける　艸樂
鍵の音もう判取を眼でさがし　涎湖
鍵一つおもむろに金庫をあける　綠雨
氣安めの鍵にたのんで家を明け　みつる
合鍵を持つて宿直醉へぬなり　同
六錢に鍵かけて有る子の金庫　奇可愛
神前の鍵も無駄とは思はれず　同
寢てゐても鍵の在所を氣にしてゐ　沐天
鍵一つ持たぬ暮しも快し　同
共稼鍵のありかへ念を押し　二南
言ひ過ぎて鍵の輕さを淋しがり　同
鍵かけるまもものどかしう子は待つて　讓次
冷えきつた手で鍵かける外は雪　同
鍵かけて見上げた空の雨模樣　同
合鍵があるとは知らぬ善良さ　琴人
裏手から這入られた事知らぬ鍵　同
合はぬ鍵錆びてゐる鍵ばかりなる　同
(五)奥樣に鍵をもらひに走るなり　觀月
同鍵のおもしろさ鞄が口を開け　亂耽
同若主人鍵の番には惜しい人　忠彌
同何時からか金庫へ鍵をはめた　あや美
同春の夜の廊下へ鍵を落すなり　かほる
(人)鍵すてる心になつて合掌し　琴人
地鮓食ひに出かけるだけの鍵　豆秋
(天)興奮へ鍵ぴか〳〵光るなり　かほる
(軸)チウリップ鍵を預かる人に咲く　路郎

川柳雜誌社
神戸支部
川柳趣味の夕
四月十一日　於八宮神社內楠町事務所
西村明珠報

兼題　盆栽　明珠選

盆栽の客へ新茶がよう香り　桃水
盆栽に口才な草見つけたり　紋太
盆栽の枝を補ふ石を据え　華水
特等のキャピン盆栽など運び　南耕
盆栽に未だ針金の跡が見へ　同
盆栽へ三面記事は無駄なもの　二南
盆栽の父へ書出し溜つてゐ　同
盆栽へ身分の違ふのなげき　睡花
盆栽とあるじへ春の陽が殘り　同
(佳)盆栽へ意見の違ふが戻り　二南
(佳)云ひ負けた母盆栽へ目を移し　卯生
(佳)盆栽へ號外の鈴聽えて來　素生
(佳)叱られた戀盆栽へ水をやり　桃水
(佳)まだ返事來ず盆栽の世話にあき　睡花

席題　タイトル　二南選

連れにものゆへばタイトル消えてゐる　卯生
タイトルがあとを續けるラブシーン　素生
タイトルを母にきかせば邪魔になる　睡花
タイトルへラムネの瓶が音を立て　華水
タイトルを讀むにもあらず燒する　紋太
恐怖々々タイトルの字が慄えてる　同
(佳)タイトルは移る夫婦の過去、觸れ　桃水
(佳)タイトルの外を喋舌つて喜ばれ　睡花
(軸)タイトルにつてマツチを探すなり　素生

席題　幕間　春秋選

幕間に密柑を一つほつてくれ　明珠
幕間に相場の話まだ續き　桃水
幕間の母にマツチを借りられる　卯生
幕間は買はれた戀になつてゐる　同
モダンガールにもどる幕間　同
幕間の旦那へ嘘がまとまらず　二南

幕間の世辭へ滅儀は出來てゐる　同
幕間を男同志は氣が揃ろひ　睡花
(佳)幕間をを招けば招き返へされる　同
(佳)幕間の窓から世間見下ろされ　紋太
(佳)幕はまだ開かず全く用がなし　同
席題　登山靴　華　水　選
登山靴嬉しく光る星があり　青水
登山靴友と別かれてバスへ乘り　よれ子
ぬかるみを武骨に除けて登山靴　紋太
登山靴一人殘した空が晴れ　桃水
愛人の汗を氣にする登山靴　同
登山靴晝から小僧借りて行き　繁堂
新婚は登山靴から遠ざかり　同
(人)登山靴バットを二つ買つて置き　明珠
(地)登山靴待合室にじつとゐず　紋太
(天)石段へかゝつて揃ふ登山靴　素生
(軸)登山靴ほどけた所で見上げて居　同
席題　ピアノ　紋　太　選
カーテンをひけばピアノへ陽がわたり　よれ子
無雜作にさわればピアノ馬鹿な音　青水
白い手がピアノ彈くなり春の宵　春秋
美しい姉妹にされピアノに居　素生
君ゲ代にピアノまちがいそうもなし　睡花
(人)伴奏のピアノは急に音を變へ　華水
(地)下女に來てピアノの艶におびて居　明珠
(天)風やんで向ひのピアノ聞えて來　靖弘
席題　スタート　互　選
肩越しに母スタートを見詰めてゐ　二南
スタートを切つた吾子に延び上がり　明珠
スタートに近く女優の色めがれ　睡花
スタートへ少し遲れて馬が來る　繁堂
スタートへ少女の胸の並べられ　春秋
スタートに居てメガホンの忙しし　素生
スタートへ合圖の聲がかれてゐる　華水

御池橋支部參月例會（大阪）

三月十七日　村松夢裡報

兼題　手　紙　かほる選
手紙にも氣丈な母が窺はれ　忠彌
當方も不景氣と書いてあり　三碧
留守宅へ速達で來た手紙なり　綠雨
(人)海越えて來た手紙の指の跡　讓次
(地)封切つて中から別なものが落ち　綠雨
(天)母へ出す手紙丈夫と云つてやり　宏朗
兼題　汽　車　かほる選
心持よく寢させてくれる終列車　よし一
一番の汽笛を聞いて床を出る　白石
二等車のがらんと晝の驛を過ぎ　靈壺
汽車の旅漸く馴れて眠り込み　いわを
(人)花嫁が手持無沙汰な汽車の窓　同
(地)汽車の音が聞える明日は雨かい　三碧
(天)涙ぐんを眞似ると汽車動き出し　綠雨
(軸)其のマッチも嬉しく汽車に乘つてゐる
兼題　心　綠　雨　選
忘れたい心になつて空をみる　いわを
どこにも無い世辭云ふて洗濯屋　青兒
ルンペンの心になつて日を送る　讓次
陰鬱な心に街の灯が戀し　宏朗
心まで見透す暇が無い見合　三碧
言い過ぎた事を心に詫びてゐる　忠彌
いつそもう貪はぬと決めて爪を切り　靈壺
(秀)洗禮の日より心が輕くなり　青兒
(同)空間をみつめて心空虛なり　夢裡
(同)心とは別な素振りを女見せ　三碧
兼題　天　才　綠　雨　選
天才だとはきついほめよう　宏朗
天才もエロの道には脆いこと　白石
早熟を天才と見た親の慾　青兒
天才を認めてくれた幼稚園　夢裡
(佳)天才であつてもパンにありつけず　夢裡
(同)うぬぼれたあげく天才氣が狂ひ　三碧
(同)天才は打上煙火に似て哀れ　同
(同)天才の蔭に小さく母は生き　同
(同)天才はいびきをかいて寢て居る　かほる
(人)天才の寫眞綿入れ着てるなり　同
(地)天才を羨む心も少しあり　讓次
(天)天才に惱みの多い日が續き　同
(軸)背の低いのが天才と言はれて居
席題　舗　道　靈　壺　選
入學のペーブメントの白い事　雅純
ペーブメント顏々々をみて通り　いわを
凍つたる舗道でモガの靴辷り　宏朗
ペーブメントに下駄の音さわて二時　讓次
つきあたりさうに燐寸をくわて過ぎ　三碧
打ち水の舗道へ春の灯が躍り　同
呑めそうな家が舗道に見當らず　かほる
不景氣を見せて舗道は暮れてゆく　同
席題　長命、空想　互　選
長命が續く札所の登り道　三碧
春の陽ざしをうけて長命　讓次
長命を喜ばれてゐる子澤山　綠雨
長命をして孫の名をおかしがり　かほる
空想は女のことに夜をふかし　綠雨

空想へ今の月給忘れたり　いわを
統計へ空想の線引いて見る　宏朗
空想へ女房の聲が引きかゝり　よし一
空想に又母親が呼んでゐる　かほる
空想へ茶びんのふたの音がして　同
空想の女に會つた春の街　三碧
弟の空想笑ふ年になり　同

川柳雜誌社
鶴町支部　**鶴町川柳行脚**（大阪）

關本雅幽報

題　春の雨

音もなく八ッ手いつぱい春の雨　山月
やつこ傘柳もつれて春の雨　同
春雨をよそに造花屋忙がしく　木馬
停電へハツキリ春の雨の音　同
本心を聞かした春の雨靜か　紅
春雨へ祇園の櫻咲き揃ひ　同
戀猫の聲しきりなり春の雨　同
春の雨今日も子供を泣かしたり　同
春の雨ネンガラインが戀をして　碧耶
引き出して見たい大鼓へ春の雨　同
春の雨心齋橋を素足にて　竹葉
春の雨いつかカフエーの客となり　ひさを
春雨に町のルンペン濡れるさえ　一龍
筍ののびてあるなり春の雨　變人
春の雨交通巡査ぬれてゐる　天柳
春の雨麥の若芽の伸び〳〵と　松枝
戀人の囁きに似る春の雨　小柳子
畫線がほしい氣もする春の雨　愚圖坊
春雨に子等集まつて傘くらべ　雅幽
石地藏はつきり濡れて春の雨　同

春雨の山みな轉寢してるやう　同

題　人形

人形をば抱いたまんま寢てしまひ　小柳子
人形のやうな顏して尼になり　紅
キユピーが嘆く時代の急轉歩　松枝
人形を抱けば立たれず泣いて居る　變人
子供もう人形のくせ知つて抱き　木馬
降參をして父親は人形買ひ　山月
人形の大きい程が自慢なり　天柳
人形に着せると着物早やく賣れ　元山
駄々子の前に人形皆うごき　碧耶
人形を抱いて妾は送り出し　一龍
人形と一緒に眠むる枕蚊帳　平行線
新妻へ市松人形送つて來　雅幽
野心家の男人形抱かされる　のぶを
市松人形ごの男にも惚れて居ず　同

川柳雜誌社
加古川支部　**加古川支部句會**（兵庫）

水田篤男報

席題　聲

乾いた聲で鮮人の道を問ひ　篤男
泣き聲を背中に馴れた妻となり　同
お早うもねむそうだねと笑はれる　椛夢
もごかしく聞く病む母の枯れた聲　三也光
愛の巢がもう產聲を待つてゐる　同
級長が叱られて教室森となり　光穗
惡聲も一寸愛嬌になつてゐる　魚城
聲だけが梅の林をぬうて過ぎ　泰山
妙な聲出す頃彼は醉うてゐる　同

席題　ぬるい

大晦月手ぬるい中に針を持ち　桃夢
白湯ぬるく病床に春を知り　三也光
ぬるい湯に女中は洗ふ氣になれず　篤男
叱られた茶漬をぬるい音で食ひ　光穗
ぬるいぞと云はれて下女の慌てやう　泰山
貰ひ風呂歸るとぬるい叱言云ひ　魚城

川柳雜誌社
叢ケ池支部　**觀櫻句會**（大阪）

畑中康夫報

四月十二日

此の日朝來の雨霽れて、うら寒いながらも好適の花日和、病院の句會のことて、何はなくとも、滿開の櫻を窓外に眺め乍ら觀櫻句會を開く。出席者三拾餘名。

本社より、綠雨、雨町、豆秋、鶴峯、諸氏及び素人、武子御夫妻等多數御出席下さいましたことを深謝いたします。

席上、素人氏より親しく有益なる御講話あり一同、氏の御病狀を案じつゝ、その徹底せる心境に敬服。多々學び得て記念撮影の後散會す。

兼題　灯　　素人選

彼奴まだ起きてるらしい二階の灯　禮二
灯の下で昨日の次の戀を待ち　水馬
村道を自轉車らしい灯が見える　舟路
生溫しさ欠伸をすれば灯がともり　百萬石
あゝ云へばこう云ひ返す灯の女　逸朗
灯がつけば何か病牀氣が息み　白眠
昨夜までとりぬし灯の無くさびし　伊勢子
灯に素足を見せて女立ち　武子
物思ひ水にうつゝた灯を見つめ　紅蔦
ふけて行く施療院の灯のうるみ　かつ美
シゲナル一つ深夜を嗤らへり　一流

病みついて大阪の灯をなつかしみ　同
鐵橋を渡る夜汽車の灯がゆれる　銀花
灯がついてよつこらしよつと飯を食ひ　長二郎
飢えてゐる俺に街の灯ゆらぐなり　奈緒美
提灯が宙を飛んでる　近い火事　沙門
手仕事の灯りを近う吊り替へる　可章
戀人の前に灯の明るすぎ　鈍愚
明滅の灯へ寂しさを打ちあけん　杜洋
公休日もう灯がついてあつけなし　梨風
閑かさは疊の目にも灯がとゞき　同
灯が點いて市場へ走る手内職　あざみ
春の灯へ何か彈きたい病み上がり　同
灯の色に染まり女給らよく笑ひ　康夫
灯を消して思ひ出だけの部屋となり　同

兼題　郊外　雨　町選

郊外電車に春をゆらるゝ　杜洋
郊外の畫擴聲機だけの聲　一流
郊外へ來てもやつぱり弱い身だ　喜久兒
郊外に住んで仔犬がほしくなり　百萬石
郊外で茄子など作りよいくらし　沙門
郊外に住むに足らない月給だ　愚寵
郊外の雀ふつくり肥つてゐ　紅蔦
新妻は郊外の夜をこわく待ち　伊セ子
郊外の春を思へば櫻咲く　武子
郊外の朝を小鳥に促され　可章
郊外に住んでインテリぶつてゐる　かづを
郊外のこんなに遠ふ空の色　銀花
郊外を鐵砲持つた人が行く　紅玉
郊外の榮種の中で飯にする　同
(五客)金持の息子郊外から通ひ　逸朗
(同)此邊からが郊外になる高架線　禮二

【寫眞說明】—　前列の向つて左から

【列二】美つか、蔦紅、雨綠、子武、人素、町雨、秋豆、子町、子ずか

人道、郎俊、石萬百、月峰、郎二長、峰寶、夫康、信清、夫晴め改シタ

柳吳、德實、品九、兒久喜、路舟め改志代喜、流一、らきあ【列三】風梨

門砂、玉紅、六平、華六

(同)郊外の友から春の便りが來　一流
(同)郊外の家日曜の聲がする　康夫
(同)うらゝかさ此處らで住んでみたくなり　百萬石
(同)郊外で女の好きな家をかり　播州
(地)郊外に住んで虚弱な子を育て　一流
(天)郊外を玩具のやうにバスもゆき　康夫

席題　花　武子選

お隣は百萬長者花ばかり　豆秋
切り花にさゝやフリージヤ良く匂ひ　舟路
咲き揃ふ櫻花の下を日傘行く　道人
朝題の大きな花へ尺を當て　清柳
來て見れば花より呑み手面白し　鶴峰
不景氣を知らず國から花便り　長二郎
恢復へ野草の花まで懐かしく　六華
團体旗丸めて降りる花の山　石松子
面會に今日來たらしい床の花　紅玉
重病へ逢はず花だけ置いて行き　同
一二輪留守の間の床に散り　水馬
筒の花拔く手を待つた樣に散り　同
垣根から花をあげたい聲をかけ　同
(軸)あこがれの花よれたましき花よ　武子

席題　胡麻化し　豆秋選

平氣で胡麻化す女給にもなり　武子
胡麻化しと知りつゝ受けやる氣なり　かつ美
胡麻化しのきかぬ頑固な父がゐる　紅蔦
胡麻化しも今更出來ぬ夜を更かし　紅玉
胡麻化して笑つてやれば笑ひ出し　水馬
塗れど〳〵さて胡麻化しの効かぬ顔　百萬石
胡麻化したことは知つてる女房の眼　沙門
胡麻化したつもりが胡麻化されて居り　石松子
(佳)胡麻化してまで生きると云ふの　晴夫
(同)獨身の春胡麻化しの多い事　武子
(同)ごまかしも手柄らしく云ふ子供　緑雨
(同)胡麻化しのうまい微笑になつて　康夫
(同)胡麻化効きすぎ寝醒めるくゐる　百萬石
(同)ベラボウに笑つて相手胡麻化す氣　水馬
(同)胡麻化しのどこや辻褄あはぬ　沙門
(同)胡麻化しきかぬ年になつて來て　舟路
(同)云ひ譯はしがお金が減つてゐる　鶴峰

川柳雑誌社

簸川支部四月例會(島根)

四月二日　於久磨緒居伊藤緑之助報

飛題　音　緑之助選

掛水の音よ米價は五圓なり　久緒
音のする方を背の子チラと見る　奈翁詠
水の出る音もうれしい美容院　青磁
下駄の音十七八を賞められる　同
言ひふせてどこか淋しい下駄の音　麗亟
つるはしの音朗かな朝に冴え　同
(秀)新緑の葉ずれの音にもぐり込む　青磁
(秀)待たされて算盤の音帳の音　同
(秀)フェルトへ女らしさの春の宵　同

辨當　奈翁選

辨當の重さうれしい一年生　桃光
辨當へ今朝もお菜の愚痴が出る　朝人
校庭へ辨當忘れた子が二人　久磨緒
ピクニック辨當がらを放つて立ち　一夢
辨當屋昨夜の味を賞められる　青磁
(秀)辨當に女學校出の見榮があり　同
辨當に不足が言へて一人ッ娘　緑之助
(秀)辨當屋競馬から目が離されず　同
(秀)辨當に先生外見しないなり　同

カーテン　青磁選

(佳)カーテンをひらさせて課長來る　奈翁詠
(佳)カーテンを引でウインド眞書な　同
(佳)思ひ出のカーテンバットを吸ひつゝ　緑之助
(佳)カーテンの白さ悲戀の顔を埋の　麗亟

菜の花　久磨緒・麗亟共選

捨てられた菜にも花咲く麗かさ　桃光
菜の花の咲く頃姉が死んだ筈　奈翁詠
平和なる村にて候菜の花盛り　緑之助
菜の花も涙ぐましき小女にて　同

自轉車　互選

自轉車を片づけて未だ呑む氣なり　青磁
自轉車のブレーキ派手に曲るなり　奈翁詠
手放しで乘つて自轉車草津節　緑之助
自轉車はもうくたびれた早さなり　朝人
自轉車に乘れて嬉しい使ひごと　麗亟

第參回關西土地句會(大阪)

衝立、賣出し、カレンダー　琴人選

衝立の隣で話す女客　無鬼
衝立を取つて眞理の春にせう　一九
衝立の向ふはダブルベッドなり　一久
衝立を置いて二間に使はれる　同
(佳)衝立へ亭主の頭低う見え　素月
(佳)見すかされた樣に衝立尖つて居　同
(佳)衝立を倒したい程待たされる　同
(軸)衝立から出て來た妹見そこない　琴人
(佳)よく賣れあれは値段が安すぎた　成瀬
(佳)賣出しへ猫の飯などほつとかれ　無鬼
(佳)賣出しへ隣時々覗きに來　同
賣出しの明日をちやあ〳〵降つてゐる　一九

賣出しの朝角帯をぐつと締め　素月
賣出日小供にもちと世辭を言ひ　同
年末の忙しい中のカレンダー　無鬼
働きへ其日々のカレンダー　素月
（人）就職も出來ず日ぬくり春を告げ　同
（地）カレンダーへ逢ふ日は印つけり　一久
（天）病ひ日のまゝにあるカレンダー　無鬼
（軸）カレンダー次週の休み見て出かけ　琴人

兼題　書留、晴れ、保險　山雨樓選

書留を待つて下宿の日の長さ　鎗生
（佳）香典の書留で來る雪の國　素月
分別が書留にするブレター　同
國からの書留母の名前で來　一久
書留でお姿し立てゝゐる　同
書留が來て品行を疑はれ　無鬼
書留へ下宿忠告らしい口　同
寢不足の顏れてゐる日本晴　鎗生
夜遊びを見すかす樣に朝日射し　素月
今日も晴れ帽子へほこり貯めて去に　同
晴れてゐる空にサイレンよく響き　一久
晴やかな顏玄關へついて來る　同
梅雨の晴間に庭草をひく　無鬼
ピクニック晴の豫報を疑はず　同
保險金取つて母子の差なし　素月
燒け跡へ保險屋宙を飛んでくる　一久
（佳）保險屋のすぐに契約高を言ひ　無鬼

塗青柳壇三月例會（大阪）

三月十八日　於塗料青年團事務所　熊谷紅報

安全地帶、汐干狩　互選

安全地帶危げのない狹さなり　柳富
我か影が安全地帶から覗き　光路
汐干狩飽いて白帆を見詰めてる　桂舟
汐干狩まくつたシャツが延びて來る　木馬
汐干狩自慢の貝を子と競べ　主税

好かぬ顏　光路選

好かぬ顏今日は笑つて別れとく　子元
好かぬ顏此塲合だと祭り上げ　博水
二次會へひよつこり好かぬ顏が來る　主税

竿　主税選

日曜を待つてた竿の辯直し　たけ志
竿さして行く船頭の聲の錆び　子元
保津川へ水竿馴れた筏乘　紅
シヤツの袖竿へ長々延される　木馬
また明日の氣に竿竹のしまはれる　光路
（軸）百ぬの氣の今日も釣竿提げて出る　主税

咲　光路選

廣告の櫻四月を咲き續け　桂舟
咲いて來た今日も新鍵を掛け　繁坊
咲く花を他所に算盤はじいてる　子元
（人）道端の折られたまゝへ花は咲き　紅
（地）滿開の造花女給にゆすぶられ　木馬
（天）三匹の蚊が飛んで居て咲いて來る　繁坊
（軸）俗人へ遠く一本咲き遲れ　光路

華水居鼎座吟（神戸）

三月二十六日夜　西村明珠報

椅子　滿腹　馬乘り

タイピスト椅子へ斜にかけてゐる　華水
裾模樣椅子へ秋をもち上げる　同
先生へ椅子を倒して立ち上り　春秋
遲刻した男が椅子にけつまづき　明珠
椅子席へ人の女房になつて來る　同
滿腹へ下宿の膳が出來てくる　華水
滿腹の社長煙突見てるなり　明珠
騎手今日の不首尾の程を詫びてる　同

桃を探ねて（大阪）

四月十二日　須崎豆秋報

虫のつく桃にはしたくない花だ　鵜峯
桃園に花のさかづき出來上り　同
牛小屋の目玉の前に桃の花　豆秋
桃の花シュツとサイダの泡が立ち　同
桃の花見てるルンペンの曇つた空だ　海洋人
フト父と桃の小枝を折つてゐた　同

柳路居偶會（滿洲）

四月十二日　岩崎柳路報

春の滿洲に櫻はなゐが
咲いた菜の花蝶々が二つ
時に蒙古の風さへ襲ふ
テナ滿洲四季の歌にある　通り蒙古風が吹き
荒む日蝕の其れの樣に　太陽黃塵に影を沒す
る日、丁度妻が渡滿最初の日曜であつた。無
意に一日を過すも何んとなく惜まれたので
先づ何時でも差支の無い登美坊、深太樓兩
君を招きて偶會を催す。

カーテン

カーテンは露西亞サラサにする君　深太樓
踊つてるらしいカーテン午前二時　同
カーテンを透してラヂオらしい唄　登美坊
カーテンの夕陽食堂車にゆられ　同
ほろ醉のカーテンに見る影法師　柳路
カーテンの風に孤獨の淋しさよ　同
カーテンへシガーの煙が突當り　同

妻

新妻をコイツと云ふて詫びる顔　深太樓
妻戀し、さえぎる晝も夜もなし　同
生醉を細君にまで屆けに來　登美坊
内緣の妻で清元など教え　同
當直へ新妻しようもない電話　柳路
徒然に妻鬼灯をならして見　同

群聲川柳社　四月例會（石川縣）

四月二日　幾郎居　關口嬬雨報

兼題　土　高田茶撫郎選

失戀の惱みは土の香を覺え　裸蹣
社會への不滿寂しく土に生く　嬬雨
土を伺ふ蟲同然な生活です　同
土ついた手へ安らかな夜の膳　同
馳せつけた頃は焦土となつてゐた　重郎
土の趣味説くに閣下は鍬を撫で　裸蹣
空想へ走り故郷の土に飽き　井佐武
春光や土が親しくなつて來て　嬬雨
踏みしめた土へ感謝の健やけく　幾郎
父と子と耕す鍬へ躍る土　井佐武
土ついた下駄三越へ氣がとがめ　覺蓮坊
退職の淋しさ土へ親しがり　裸蹣
（佳）土に還れ土に還れとパンで喰ひ　望柳
（佳）春の土パラソルの影輕く受け　幾郎
（佳）演説の一つもやれて土に飽き　嬬雨

兼題　旅　高田茶撫郎選

旅歸り子に持たせやる隣まで　銀峰
團体の幹事は別の部屋をとり　正兒
氣粉れな旅角力まで日を延ばし　幾郎
旅を終へまた憂鬱が生きて來る　嬬雨
氣の合つた相談にわか旅となり　望柳
人生の旅へ雄々しく呱呱の聲　嬬雨
來て見れば想像ほどの土地でなし　井佐武
起きぬ子へもの足りなさのみや土産　幾郎
（佳）一人者旅の情にひつかゝり　多加雄
（同）もう發車迫れど幹事未だ乘らず　井佐武
（同）はつ旅へ未だ打解けぬ妻を知る　嬬雨
（同）果しない旅とも知らず生れてる　幾郎

席題　吟「笑顔」　高田茶撫郎選

お通夜へふと硬ばつた笑ひ顔　幾郎
入學の報せ一家を笑顔にし　望柳
親友は笑顔で禮をすませとき　望柳
女秘書笑顔で今日も連れ出され　井佐武
笑顔よい巡査へみんな言つちまい　同
嫁ぎ行く姿へ笑顔並んでる　嬬雨
祝電を讀んでゐるのも笑ひ顔　幾郎
首垂れてゐるのへ笑顔寄つて來る　同
（軸）うつかりと見せた笑顔へ乘ぜられ　茶撫郎

聖城川柳社句會集（石川縣）

高田茶撫郎報

清谷旭洋氏歡迎句會

「二人連れ」　旭洋選

二人連れだつたらと旅の夜は更ける　翠峰
二人連れを急ぎ足にて追越せり　山々
おばさんの宅がこうわい二人づれ　燕子花
大道を狹しと二人醉つて行く　雪杖
雜踏にまぎれ込みたい二人にて　亂雨
娘とも見へぬ終電車の二人連れ　醉羊
ストーブに遠く離れて二人連れ　茶撫郎
ともかくも戻りは二人連れで來る　同
（佳）連れだつた二人へ道が近くなる　吉祥
（同）二人來て別な朝の陽見て歸り　茶撫郎
（同）敷島を買ふは一で人ない女　同
（同）引く力押す力へ二人連れ　白花子
（軸）空席の一つに連れは見返られ　旭洋

榮葉服　燕子花選

酒乾して酒乾して榮葉服　旭洋
榮葉服病む父母へ黑くなり　吉祥
榮葉服坐れば律義そうに見へ　茶撫郎
マルックス讀んだ話の榮葉服　旭洋
榮葉服脫げば汚ないものに見る　茶撫郎
コップ酒今日も淋しい榮葉服　白花子
別莊へ罵しつて見た榮葉服　旭洋
榮葉服小錢の音を淋しがり　亂雨
（佳）榮葉服今日の糧なる朝を出る　吉祥
（同）そら雨よ降つてくれな榮葉服　旭洋
（同）榮葉服直すにひまのいるも戀　茶撫郎

「預」　茶撫郎選

仲人は寫眞預くやうに受け　旭洋
預金帳にほこりの積る長火鉢　亂雨
預つた帶物に釘付されてゐる　翠峰
預つて置くと水引解いてゐる　吉祥
預つた梅にも春は訪れる　旭洋
預つておく女給のたくらみ　燕子花
預ると言つて其まゝ捨ておかれ　雪杖

五　客

預つて來た品物の紐が切れ　旭洋
腕白を教師の二字に預けてる　白花子
粹興な懷女に預けてる　同
おとなしく預けて行くも女の子　旭洋

預つた義妹の年妻の年　山々

(人)預ければ旅館返事が輕くなり　吉祥
(地)妾宅へ預けて旦那機嫌よし　燕子花
(天)貧乏に馴れて預金を卑しまれ　旭洋

二日句三味氏歡迎句會（二）

「轉宅」　句三味選

(秀)轉宅をするには惜しい水がある　醉羊
(同)轉宅の早や馴染んでる女の子　茶撫郎
(同)轉宅のもう落付いた庭の色　同

「缺乏」　茶撫郎選

(佳)缺乏の銚子は威勢よく振られ　醉羊
(同)仮櫃の底へ明日は知らぬなり　白花子
(同)品切れに客を戻した淋しさ　句三味
(佳)酒くせもれる四本目手を振られ　醉羊
(同)缺乏の底から銅貨一つ落ち　同

「追羽子」　吉祥選

(佳)初春へ昔戀しい羽子の音　白花子
(同)追羽子の一回互に鈴が鳴り　句三味
(同)勇敢につゞた追羽子屋根へ飛び　吉龍
(軸)追羽子の手の足もとに母も出る　吉祥

梶井井々樓歡迎句會（三）

「慣れ」　井々樓選

(客)物慣れた唄に車を輕う曳き　柳鴉人
(同)くたびれを唄にして馬子歸る　眺水
(同)轉任の始めに記者が慣れて來る　同
(同)不自由を思はぬまでに盲なり　雪杖
(同)電燈の暗さに慣れて差無し　茶撫郎
(同)もう慣れてカフエのドア強く押し　青豊
(地)一驛を過ぎて話のはずむこと　同
(天)何事も慣れ切つた今日の下駄　茶撫郎
(軸)どつかりと腰をおろして莫卷の火　井々樓

「初産」　燕子花選

(佳)父さんに似たが嬉しい若い母　亂雨
(同)初産へかつて見せない笑顔なり　茶撫郎
(同)初産の日を家にぢつと居る　山々
(同)初産にさても財布の輕いこと　茶撫郎
(同)初の子の重さが嬉し老いた父　亂雨

「纏る」　亂雨選

(佳)父それからは課長纏める氣になり　燕子花
(同)纏まりて母一入に涙ぐみ　柳鴉人
(同)纏められ初春重ふくる賀狀　白花子
(同)長火鉢何か思案の纏らず　溪鶯
(同)絶景を纏めてレンズ仕舞はれる　井々樓

新誌友

（六年四月十四日まで）

「川柳雜誌」一前半分金壹圓八十錢以上拂込の讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載します。何卒此際新讀者を御勸誘下される樣御願ひ申します。御紹介下される方には、川柳雜誌一の近刊を見本として差上げますからお申込み下さい。（緣雨）

藤間紫白（中澤濁水）見市德太郎、瀧口壽惠子、古門康雄、鹽田素扇、永田儀三郎、今川喜三郎、永島學、中川知一、廣島三郎、竹內機見女、木山さざを、尾崎明晴、村野建雄、佐野踊、手塚豐次郎、定廣金右工門、太田謹寸（本社事務所括孤內は紹介者）

轉居

小出泰弘君は（兵庫縣武庫郡大社村字北蓮毛九五〇、ノ六）

岩本素人君は（大阪市西淀川區海老江上通四丁目三へ）

食滿南君は（兵庫縣今津町今津洲鳥一ノ四甲へ）

子園球場前へ）

石田沐天君は（大阪市西區阿波座二番丁十四へ）

駒田白帝子君は（奈良縣吉野郡大淀町下淵へ）

前號正誤

四三頁「指」　朝陽選
フト見たる世帶疲れの指のしわ　無鬼

四八頁「勞働」　路郎選
勞働と別な力で子を抱き　卯三

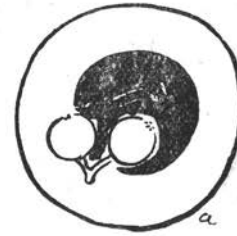
四三頁　戸籍調木村晃卓
（三）字和郡（五）明治二十三年（八）「霜の竿
ふく女房手から晴れ」　素人選
六〇頁「晴」
秋晴の或る日彼女と野邊を行く　計加

二五頁（見出し）
難解史句

御送金は一切無料

振替用紙で御送金の場合には郵便局に拂ひ込む手數料を本社で負擔します

「川柳雜誌」は愛讀者のものです。此の信念のもとに、創刊以來働いてきた本社は、今度思ひ切つて右のことを斷行いたします。振替は僅かの費用で確實に、送金と通信とができますけれども、僅かなりとも其の手數料を御送金者が負擔せねばなりませぬ。それゝ今後は一切本社で負擔いたし、所要の御送金高だけお拂込みになれば、他には一厘も負擔されずともよろしいやうにいたしました。たとひ僅かの奉仕の務めではありませうが、どうぞ本社の徽衷をお汲みとりくださつて、せいゝ御利用くださるやうにお願ひ申します。



杭全町 MEMO

綠雨

▼路郎先生の病は殆んど良くなられました。もうぼ〳〵つ仕事をしてゐられます。讀者やその他の方々から多數の御見舞をうけましたのでよろしくとのことでした。

▼住田亂耽君は四月十五日目出度華燭の典を擧げられました。

▼庄萬よし君は三月廿一日全國大衆黨の演說に北陸線芦原溫泉に行かれ、三時間程溫泉氣分に浸つたと云つて來ました。同君の長女敏子さんは今年から生野女學校へ入學されました。

▼太田朝陽君は三月廿五日別府支部の木村晃卓君としたしく語合つて來られました。

▼竹內多聞君は四月四日嚴島から岩國へ遊覽に行かれました。「涼しさに裾からぬらした嚴島一の句を寄せられました。

▼朝田新水君は三月廿一日高野山詣りをされました

▼川村觀月君は。月二日長男勉さんを擧げられました。

▼伊藤綠之助君三月廿日松江から美保關へ遊覽されました。「五本松グレトバークの感嘆符」の句を寄せられました。

▼上野錦水君から第二回川柳作品展覽會を四月十五日から三日間丸和デパートで催され前回よりも盛會でしたと知らせて來ました。尙同君は本誌の宣傳ビラを印刷されて宣傳と努力されてゐられます。

▼本社螢ヶ池支部で四月十二日午後一時から觀櫻句會を催され本社からは素人、武子、雨町、豆秋、鶴峰の諸君と私とが出席致しました。當日紀念撮影などしてなか〳〵盛會でした。

▼本社の四月例會に四度刷の案內狀を出した處が贅澤な印刷に驚かされた方もありました。

▼本社の支部で御旅支部、螢ヶ池支部、御池支部等は回覽誌を出されて熱心に研究されてゐられます。他の支部で大いに見ならつていゝことだと思ひます。

▼舊社友の若井たけし君(近江)は目出度結婚されました。

▼菱井不路子さんは向井孝治郎氏と四月三日目出度結婚されました。

▼函館川柳社(函館市青柳町龜井花童子方)から柳誌「かもめ」を五月に創刊されるそうです。發展を望みます。

▼酒井うをのかみ君(金澤)は元大阪に勤務されてゐられたことがあるので京阪の春をなつかしく思ひ出してならぬと云つて來られました。

▼酒井啞聲君(明石)四月二日仰の人である、本社の同人高橋かほる君と明石人丸山で逢ひ猪口の交換されたといふ通信に接しました。二君は度々明石で逢はれるとの事。

▼ふあすと川柳社では四月十二日午後一時から明石觀櫻川柳會を催されました。會するもの二十三名盛會だつたそうです。

▼川柳久良岐社では談林花樽碑の會を三月廿八日午後一時より東京市外日暮里驛坂上眞言宗養福寺で催されました。

▼高橋かほる君の母堂が四月十一日午前四時七十一歲で亡くなられました。自宅で十三日午後四時から五時まで告別式を營まれました。當日參列者は番傘川柳社の水府氏本社から路郎先生、里十九、艸樂、悟郎、亂耽、夢裡、ひろし、琴人、杏三、萬よし夫人、新水、町二、雨町の諸君と私哀悼の意を表します。

▼松村敏郎君(本名馬場正二)は サンフランシスコ支部を引受けてくれられてゐた舊社友で本社のため隨分努力されてゐましたが病氣のため退社されたのでしたが本年一月廿一日に永眠され二月三日米國桑港佛敎會で盛大な葬儀を營まれたそうです遙に哀悼の意を表します。

▼澤井朱唇子君は本誌創刊以來の讀者でしたが四月十三日永眠されました。哀悼の意を表します。

▼藤原游魚君の遊二郎君が十三日永眠されました。哀悼の意を表します。

▼角出蕊郎君(山中)が群聲社を設け每月二回川柳會を催すことを知らせて來ました。

▼後藤無角君(廣島)は本年六十一歲の高齡ですが初めての投句家で一句を幾すことこれから努力すると云つて來ました。一環曆で初めて見たる柳の芽一句を寄せられました

▼私は三月廿六日の急行で鄕里へ赴き廿七日大聖寺町の聖城川柳會の高田茶撫郎、小林亂雨の二君と約二時間程愉快に語合ひました亂雨君に驛まで見送られました。廿九日金澤支部中川めかくし子君を訪れて同君の宅で金澤柳壇の先輩酒井雅樂頭君や柳二郎、銀砂子めかく子の諸君等と夜の二時まですき鍋をつゝきながら隔意なきもてなしをうけました。ほんとうにうれしい集りで感謝してゐます

▼本號の編輯は路郎先生、琴人、町二、山雨樓鶴峰の諸君と私で本社事務所で致しました。

編輯の窓

—琴人・町二・山雨樓—

▼青葉薫る五月となりました、我が「川柳雜誌」は常に新味を保持して柳界の太陽たらんといたして居ります。

▼本號の異彩は古句研究の權威蛭子省二氏の「竹馬居雜筆」を初め長野吉高氏の「柳の絮」の續篇其他本社同人が轡を並べて筆陣を張つて居ります。

▼山本雨迷、增位汀柳の兩氏が新に選者として推薦されました作家各位の氣分を新たにして良い創作が得らるゝ事と存じます此機を外さず大に句想を練つて折角兩氏の選に好成績を贏ち得る樣御奮闘を願つておきます。

▼毎號各方面から絶大の好評を專して居ります月評「作〻展望」は主幹の病氣や他評者の繁忙の爲遺憾ながら今回は休みました次號には必ず掲載し得られるやうにいたします。

▼蛭子省二氏は永年御持病の喘息と闘ひながら本誌の爲めに貴重の研究文を絶へず御執筆下さつてゐましたが近來非常に御健康を害はれ御執筆も思ふまゝでないとの事、誠に心痛して居ります全國柳壇の爲にも一日も早く御快方を祈つて居ります。

▼ジヤーナリズムの跋扈は我が柳界にまで跳梁して流行感冒の猛威の如くです是に感染すると人間の本性まで蝕食されます。それかあらぬか近來柳壇の一角に如何はしいジヤーナリズムの慢性病者が出て來ました。我社の堅實さは幸に此悪風には犯されません。本誌は正しく、しかも常に尖端を歩みつゝ柳界開拓へと志して居ります。

▼繁雜なる劇務のため不斷健康を害されつゝも柳界のために全生命を賭して盡瘁せられてゐる主幹路郎師は目下驚天動地の大計劃を廻らされてゐる。併し輕々しく天機は、漏すべからずですから割愛しておきます（琴人記）

▼川柳雜誌が漸を追うて正當に社會進出をなしつゝあることの證左を隨時隨處に發見して非常に心強く思つてゐる。

▼川柳に對して最も理解なき偏見を持者は、一般社會人ではなくて却て長詩、短歌、俳句等を含む詩壇の人々である。我々も大いに彼等の詩を理解すると共に、彼等に對して我等の川柳に對する正當な理解を要求せねばならぬ。そのためにもよき川柳を生まればならない。同人社友は固より誌友並に一般投稿家諸君の絶えざる奮起を望むや切である。

然るに往々疲勞素のために打ちまかされて、そのまゝ寢込んでしまふ有爲な作家の少くないことは淋しい限りである。肉体の疲れはこの疲勞素を喰ひつくす他の物質のために常に体力を復活する。川柳上の疲勞素を喰ひつくすものは恐らく情熱であらう。情熱を失ふといふことは作家の睡眠を意味する。

▼併し情熱を以て作句する、といふことは一つの比喩であつて誰も情熱の昂騰にふるへる手では書けない作品の背後には常に作者の冷徹した眼が光つてゐなければならない。川柳上の寫實とは現實へ對して所謂辯證法的觀察をしてゆくことであるとも云へる。

▼「川柳雜誌」が近頃むづかしくなつた、といふ言葉を時々耳にするそんなことはないと私達は思つてゐるが、併し初心者の方々への研究文字も近く具体的に誌上に表れる筈だから御期待を願つておきます。（町二）

▼川柳家戸籍調べを擔當して以來各方面から非常な好意を以つて回答を煩はしてゐることを感謝します。ところがその体裁が箇條書きになつてゐるせいか、内容の硬化を感ぜられる憾みがあります　今後照會しました向は出來るだけやわらかに、打ち解けたそして打ち明けるやうな態度で書いて頂きたいと思ひます。

▼路郎師から本號の原稿に付て「やゝ堅すぎる原稿があるから執筆者は注意されたい、もつと平易に眞髓をつたへるやうに一」といふ批評と希望とがありました。われ等は本誌を愛讀して頂く多くの柳人の好尚に答へるべく深く顧みて今後の進み方に苦心を拂はなければならぬと思つてゐます。

▼近來各地からの會報がすばらしい勢ひで殺到して參ります。會報の一句々々を殘らず拜見させて貰つてゐる自分はこれに向ふ毎にはちゞれるやうなときめきと喜びを感じてゐます。しかし永らく會報が途切れるとたまらなく寂しさに襲はれます。各支部各方面共聽で來る切夏と共に以前に增した旺盛さを見せて頂くやう地方の奮起を祈ります。

（山雨樓）

投稿規定

▼近作柳樽及課題吟の句稿は葉書又は同型の厚紙に各題別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事

▼近作柳樽は一部又は二部のいづれかを明記する事。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第八卷第七號課題

五月五日締切（各題十句以内）

▼蠅　麻生葭乃選
▼糸屑　高橋かほる選
▼職人　中見光路　木村晃卓共選

第八卷第八號課題

六月五日締切（各題十句以内）

▼埃　蛭子省二選
▼飛石　橋本綠雨選
▼都會　增位江柳　山本雨迷共選

毎號募集

▼近作柳樽（一部）十句以内　麻生路郎選

▼近作柳樽（二部）十五句以内　安井ひろし選

◇近作柳樽の一部と二部へ同一人で投句することはお斷りします。

▼光耀抄　麻生葭乃選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部　金參拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢
（半ヶ年分以上御送金の方には投句用箋を贈呈致します）

▼御送金は振替口座穴阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます　▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

昭和六年四月廿五日印刷
昭和六年五月一日發行
第八卷第五號（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸二郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社
振替穴阪三一五一四番
電話天下茶屋二五七九番

事務所　大阪市住吉區杭全町六〇三番地　川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店
（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市内　各書店）
（東京伸見世）玉森堂（神戸）米田、後藤、寶文館（圖館）
石鏃（京都）三宅（松山）弘文舍（石川縣）マコトヤ

川柳雜誌社關係の人々（順はろいい）

賛助員

池澤樂居　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　國枝史郎　藤村作　藤本卯之助　赤井清一　淺田一　末弘嚴太郎

川上三太郎　米村あん馬　吉田清平　岡鳥　川村花菱　田村孝介　窪田銀波　安川久流　前田雀郎　前田五健　柴谷柴舟　篠原春雨　蛭子省二　相森東魚　元紋太

客員

伊藤彦造　伊藤綠之助　大島濤明　田翠夢　岡田三面子　池田雪峰

社友

石川双葉子　松田多郎　三好計加　朝田新水　田中雨迷　白井梅里　關本雅幽　水谷鮎美　庄萬よし　西田艸樂　山本丹路　平井蒼太　日野華水　須崎豆秋　杉谷專路　西村明珠　増位黄汀　柳日野華水　熊本櫻果　藤岡靈雷　桐靈月　片川觀月　河野双車　福田鶴峰　立井登美坊　辻左馬　楊柳川洲馬　岩本素人　安井ひろし　橋本綠雨　松丘町二　岩崎柳路　伊藤愚陀　松盛琴人　福田山雨樓　長谷川一徹　太田朝陽　出口雨町　龜井花童子　安西杏三　高橋かほる　麻生葭乃　竹内多聞　住田亂耽　中島鐵洲　中見光路　喜多春秋　木村晃卓　村松夢裡　中澤濁水　中野裸人　中野柳陽　中川めかく子　長山元水　阿部閑生　北山悟郎　淺井冷々子　櫻井圓角　上野錦水　田光穂　藤里好古主　桑原京郎　三輪夏曉　酒井駒人　麻生路郎

編輯局（同人）

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
天滿支部（大阪市）幹事北山　悟郎
濱寺支部（大阪府）幹事太田　朝陽
神戸支部（神戸市）幹事日野　華水
山口支部（山口縣）幹事柳川　洲馬
國館支部（函館市）幹事龜井　花童子
高知支部（高知市）幹事中澤　濁水
梅田支部（大阪市）幹事川村　觀月
螢ヶ池支部（大阪府）幹事硲　一流
金澤支部（金澤市）幹事中川めかく子
田邊支部（和歌山）幹事辻　左馬
篠川支部（島根縣）幹事伊藤　綠之助
豐橋支部（愛知縣）幹事白井　梅里
平塚支部（神奈川）幹事酒井　駒人
加古川支部（兵庫縣）幹事水田　光穂
京都支部（京都市）幹事桑原　京郎
鳥取支部（鳥取市）幹事中島　鐵洲
別府支部（別府市）幹事木村　晃卓
堺支部（堺市）幹事友淵　貴山
松山支部（松山市）幹事岩本　素人
守口支部（大阪府）幹事朝田　新水
御旅支部（大阪市）幹事櫻井　圓角
高岡支部（富山縣）幹事越田　久水
天王寺支部（大阪市）幹事須崎　豆秋
平野支部（大阪市）幹事藤岡　櫻果
鶴町支部（大阪市）幹事關本　雅幽
小松支部（石川縣）幹事上野　錦水
高知第二支部（高知縣）長山　元水
御池橋支部（大阪市）幹事村松　夢裡

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南五六二番

廣告欄

川柳雜誌 創刊 柳誌 かむね

「新」五句　鈴木　久春選
「味」五句　村田　周魚選
研究吟「土」一句　神尾　三休評
雜詠　句數無別限　龜井花童子選
各締切　四月十五日嚴守
用　紙　半紙半截縱書
奬勵賞　募集吟天位呈賞の外入選句を採點し六ヶ月毎に最高以下三位迄「大家半折、漫畫半折」を贈る
投句所　函館市青柳町五〇　龜井方　函館川柳社
誌　代　一部十五錢　半ヶ年八拾錢　一ヶ年壹圓五拾錢

公私月報　毎月一回發行
定價　一部十錢
送料　二　錢
一ヶ年前金送料共壹圓四拾錢
東京市本郷區龍岡町一五
發行者（宮武）外骨

社告

本社の例會案内希望の方は左記へお知らせをお願ひします。
大阪市天王寺區北河堀町三
會報係　福田鶴峰宛

合本と殘本

本誌の合本が總布製美麗表紙附（金文字入）で書架を飾るにふさはしい簡素な製幀に出來ました。
第一卷　第二卷　各金五圓也
第三卷　第四卷　各金參圓也
第六卷　第七卷　各金參圓也
當分第五卷に限り
特價（合本）金壹圓五拾錢
各送料十八錢
尚古い川柳雜誌御入用の方には特に左の値段でお頒ち致します。いづれも下記宛御申込下さい。
第二號より第四十七號まで各一部　金拾錢
第四十八號より第八十三號迄各一部　金貳拾錢
（但し一號九號十二號廿一號廿五號廿六號廿七號はありません）

川柳雜誌社事務所

新聞雜誌 印刷便覽
附新聞紙法及記事關係諸届樣式、金五拾錢
大阪市東區農人橋二丁目
發行所　藤本兄弟印刷所
振替大阪八二八四番
藤本卯之助編

清酒

白鶴禮讃

白鶴をチントンシャンと提げて來る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狹う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁とはむりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寢る

攝津灘 嘉納合名會社釀

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和六年四月廿五日印刷納本　昭和六年五月一日發行

養榮の髮毛ぬせ戟刺を髓腦

伊豆椿ポマード

國產唯一　大島椿の精

輝く美髮

伊豆椿香油本舗

いさ下川愛御に直今
りあに店藥品粧化名有國全

川柳雜誌

（第八十八號）

定價　金三拾錢